

## 貝交易と国家形成 － 9世紀から13世紀を対象に－

木下尚子  
熊本大学

KINOSHITA Naoko  
University of Kumamoto

### はじめに

本稿は、沖縄のグスク時代を特徴づける琉球圏<sup>(1)</sup>がどのように形成されたのかを、9世紀から13世紀の貝交易を通して論じ、国家形成への胎動の一端を理解しようとするものである。具体的には、新石器時代以来、宮古凹地<sup>(2)</sup>をはさんで互いに没交渉であった先島諸島と沖縄諸島以北の島嶼とが、この時期どのような歴史的経緯で共通の交易圏を形成するのか、また11世紀以降琉球列島全域に登場するカムイヤキ<sup>(3)</sup>、滑石製石鍋<sup>(4)</sup>、中国陶磁が、どのような経済状況において琉球列島にもたらされたのかを、大和におけるヤコウガイとホラガイ需要に注目して論じるものである。

### 1. 問題の所在

#### (1) 琉球史の特質と考古学の成果

1989年、歴史学者の高良倉吉は、琉球・大和の歴史を概観して、「琉球・沖縄史の基本的特質」の第一が、「みずから独自の国家を成立させるほどの歴史過程をたどった点」であり、「先史時代という長期におよぶ歴史的営為を前提に登場するところの〔中略〕古琉球の時代」であると見て、先史時代から一気に国家を形成した点、つまり古琉球<sup>(5)</sup>の形成をもっとも重視した（高良1989、p. 18）。高良は古琉球の出現について、日本の古代末・中世前期の在地武士団や海賊行為をとまなう海民の動向、南宋から元代の東中国海における海上活動の活発化に注目して、「これら両地域における新たな動向が、先史時代の終末期を迎えていた琉球・沖縄に強い影響を及ぼし、その時代的転換を促す主要な契機になったのではなかろうか」としている（高良1989、p. 29）。こうした視点は、『中山世鑑』、『中山世譜』、『球陽』<sup>(6)</sup>などに基づいてのみ琉球史を理解する<sup>(7)</sup>ことの多かった文献史学において、画期的なものであった。高良の視点は、1960年代後半から80年代にかけて飛躍的に資料の増加した考古学の成果に拠るところが大きい。この間の考古学研究の動向を整理して高良の論点に接近し、考古学的問題点を明らかにすることから始めたい。

1966年、高宮廣衛は、グスク<sup>(8)</sup>に特徴的にみられるグスク土器、カムイヤキ、中国陶磁、鉄器、瓦を整理し、その登場とグスク時代の時間的対応を述べて、基本的な動向を示した（高宮1966）。1967年、フェンサ城貝塚が調査されて、グスクに特有の土器とそれ以前の「（沖縄貝塚時代―筆者注）後期出土土器の手法を大きく残している」<sup>(9)</sup>土器が層位的に出土した。前者はグスク土器であるフェンサ上層式<sup>(10)</sup>、後者はフェンサ下層式<sup>(11)</sup>と命名され、前者にカムイヤキが、後者にはカムイヤキと中国陶磁が共伴することが確認された（友寄ほか1969）。その後これら型式の位置付けや年代比定についていくつかの考えがだされた（嵩元1972、當真1979、安里1983）が、1978年に金武正紀が沖縄本島の熱田遺跡で集落跡を調査し、12世紀において、グスク土器、南宋白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋、刀子、勾玉が共伴することを明らかにすると（沖縄県教育委員会1978）、フェンサ下層式が貝塚時代最後の型式であり、フェンサ上層式は12世紀以降の型式とみることで大方の意見は一致した。グスクからグスク時代を追究した當真嗣一も、その成立が12世紀後半～13世紀にあることを示し（當真1971、1985）、中国陶磁の研究でも同様の考えが示された（鈴木1981）。佐藤伸二はカムイヤキ（南

島の須恵器)を総括的に研究し、これが「後期砂丘時代」に始まること、「その焼成地は沖縄を含む南島のどこか」であろうと指摘した(佐藤1970)。1981年、果たして徳之島でカムイヤキ窯が確認され、その年代は、木炭のC14年代測定結果により11世紀～13世紀とされた(伊仙町教育委員会1985)。こうした調査・研究によって、グスク時代の開始期はしだいに12世紀前後に絞られ、この時期を前後して、カムイヤキ、滑石製石鍋、穀物、中国陶磁、多量の鉄の登場することが明確になったのである。

一方安里進はグスク時代における農耕の開始に早くから注目し、久米島ヤジャーガマ遺跡を調査して、フェンサ下層式と上層式の間に、ムギ、コメ、滑石製石鍋、カムイヤキを伴う時期の存在することを指摘した(安里1975)。安里はこの時期の歴史的必要性に鑑み、これを「生産経済時代」として貝塚時代からグスク出現以前の過渡期として独立させた(安里1988)。また安里は、滑石製石鍋の大宰府における型式編年と時期比定、琉球列島における石鍋模倣土器の在り方を根拠に、その琉球列島への登場の上限を10世紀に遡らせ、これを前提として石鍋とグスク土器が10世紀に、カムイヤキが11世紀に、農耕が12世紀に、大型グスクが13世紀に、それぞれ琉球列島に登場したことを説いて、グスク時代への段階的変化を説いたのである(安里1988)。

これに対し金武正紀は、熱田遺跡ほか沖縄諸島から先島諸島にいたる遺跡の出土状況に立脚して、「12世紀頃に中国産陶磁器、長崎産滑石製石鍋、徳之島産カムイヤキ(須恵器)がはいってきたことで沖縄の社会が大きく変わっていく」として、外来要素が、比較的限定された時期に一気に琉球列島にもたらされたとした(金武2001、p.101)。金武は、これら3品のセット関係を重視している。

池田榮史は両説をふまえながら、琉球列島への搬入遺物は「滑石製石鍋や類須恵器(カムイヤキ、筆者注)が先行し、これにやや遅れて中国産輸入陶磁器が持ちこまれる傾向が認められ〔中略〕、このことは琉球列島への働き掛けにおいて、中国よりも日本本土の動きが先行していた結果とも理解される」と指摘した(池田1995、pp.288～289)。

最近の石鍋研究や大宰府における編年集成、中世食器研究、中国陶磁の研究成果等を参照すると(木戸1995、太宰府市教育委員会2000、吉岡1997、亀井1993)、時期については、金武の解釈がより妥当であると、私には思える<sup>(13)</sup>。ただ金武も注意するように、12世紀前後の指標である白磁玉縁口縁碗(金武1989)にも新旧の別があって、その流入には「若干の時間差」が考えられる(金武201、p.99)し、池田の指摘のように、琉球列島ではカムイヤキが、中国産白磁に先行することも明らかである。論者による考えの差はあるものの、高良の指摘した琉球史の特質は、12世紀を中心とした比較的短い時間において、段階的に登場した多元的な外来文物の流入に起源していることが、考古学的に解明されたといっている。

## (2) 研究の到達点

12世紀前後の琉球列島について、明らかにされた考古学的状況をまとめてみると、以下の3点になる：

- ① 11世紀には徳之島で中世的な陶器であるカムイヤキ窯の操業が開始され、その製品が11世紀から14世紀にかけて、奄美・沖縄諸島を中心に西は先島諸島の与那国島、南は波照間島、北は吐喝喇列島、鹿児島県出水平野にいたる地域に分布する。
- ② 11世紀末から12世紀前半にかけて、白磁玉縁口縁碗・白磁端反碗を代表とする中国陶磁が沖縄諸島、先島諸島に登場する。
- ③ 11世紀後半から12世紀にかけて長崎県西彼杵郡産とみられる滑石製石鍋が、白磁玉縁口縁碗・白磁端反碗などと共伴しつつ、琉球列島に登場する。

琉球列島の12世紀前後の変化は、徳之島、中国大陸、九州島にそれぞれ起源しつつも一連のもので

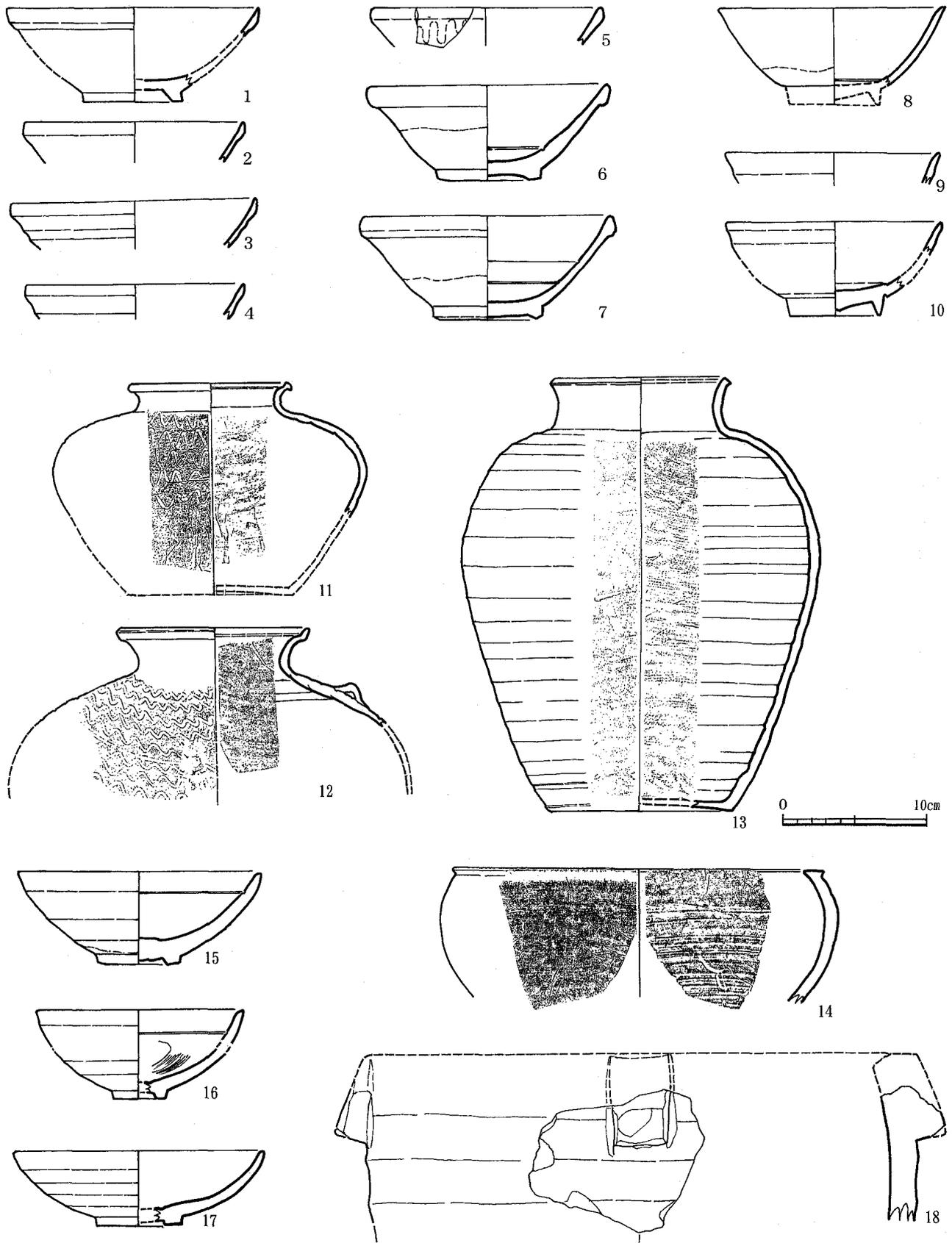


図1 白磁・カムイヤキ・滑石製石鍋

1～7：白磁玉縁口縁碗、8～10：白磁端反碗、11～14：カムイヤキ、15～17：白磁ピロースクタイプ碗、18：滑石製石鍋  
 (1～3・8・10：熱田貝塚、4・9・18：大泊浜、5：サーク原、6：伊波後原、7：新里村(西)、11～14：カムイヤキ古窯跡群、  
 15～17：ピロースク)

あることに大きな特徴がある。こうした動きについて、安里進、池田榮史、金武正紀の以下の論考がある。

- ・ 「琉球を市場として亀焼（カムイヤキ、筆者注）を流通させた商業集団」がいた。「彼らは琉球の島々を巡って石鍋・亀焼・中国陶磁器と夜光貝・硫黄・赤木などと交換し、そして入手した夜光貝・硫黄・赤木などを、八郎真人<sup>(12)</sup>のような日本商人の石鍋・中国陶磁器と交換したと考えられる」（安里進1996、p. 15）。八郎真人のような商人は「博多の宋商人と交易して唐物を入手し〔中略〕、宋商人たちは日本で入手した特産品を中国へ運び、そこで東南アジアの香料・香辛料や銅銭・陶磁器などと交換した。つまり宋を中心とした東アジア交易体制の延長線上に、琉球の亀焼商人の活躍もあったといえる」（安里1994、p. 23）。「亀焼窯の生産と流通の背後に、窯業生産集団の管理とともに、流通媒体となる『商人集団』をも統一する政治的統率者の存在も予想される」（安里1991、p. 81）。
- ・ 「類須恵器は明らかに琉球列島を分布圏としており、当初からここを視座に据えた上で、徳之島に生産の拠点を求め、交易活動を行っていたことが知れる。〔中略〕滑石製石鍋と類須恵器については、〔中略〕日本本土との結びつきが強い商業集団によってもたらされたものと考えられる。これに対して後出するとされた〔中略〕中国陶磁器の流入には中国における北宋から南宋への移行と、その南宋代の中国商業集団の活動が何らかの関係を持つものと想定される。〔中略〕この交易によって、南島から持ち出された物は明確ではないが律令期に見えた赤木や螺鈿細工の原料となるヤコウガイなどが、引き続き調達されたのかもしれない。あるいは琉球列島の地理的な位置から見て、南島産物の調達とともに、東アジアを巡る海上航路上の停泊給水地として活用されたことも考えられる」（池田1995、pp. 289～290）。
- ・ 「白磁玉縁碗、滑石製石鍋、カムイヤキ系須恵器がセットで出土することから、九州経由で持ちこまれた可能性が考えられる。それは博多港を中心とする博多遺跡群から白磁玉縁碗が多く出土することと関係があるのではなかろうか<sup>(14)</sup>」（金武1989、p. 18）。

安里、池田ともに、カムイヤキが徳之島で操業し、その消費地域が琉球列島を中心としたものであることを重視して、商業集団の存在を想定している。その実態を、安里は「琉球の亀焼商人」と見、これが日本商人との間を中継ぎ貿易していたと想定しているのに対し、池田は「日本本土との結びつきが強い商業集団」と見ている。池田はまたカムイヤキと中国陶磁の流通を時期的に分け、12世紀以降流通する中国陶磁については「南宋代の中国商業集団」の存在を想定しているが、金武はこれを博多経由であろうとみる。交易の実態について安里・池田ともに、夜光貝・硫黄・赤木の入手のためであると、池田はそのほかに海上航路上の停泊給水地としての意味を指摘している。

12世紀前後の琉球列島に大きな変化をもたらした原因が、夜光貝・硫黄・赤木を求める商業集団の登場にあることは、安里、池田の一致した解釈である。「この私貿易によって富が蓄積され、権力者が出現する一つの要因となり、ついにグスク時代を迎えることになる」（金武2001、p. 39）というのが、この問題に対する、考古学の現在の到達点といえる。1989年に高良が示した「交易や海賊行為に走った西日本・九州方面の武士団・海民の活動」や、中国の東中国海における交易の活発化の「余波が東シナ海東域の琉球・沖縄まで及んだ」（高良1989、p. 28）とした想定は、大和・中国の「商業集団」を抽出した以上の研究でより具体的になったといえる。

### （3）問題の所在

12世紀前後に、ある集団が経済的目的で琉球列島に強く関与するようになり、その目的が夜光貝・硫黄・赤木の入手であったとするこれまでの研究成果は、日宋貿易の交易品目や律令時代における南

島交易研究とも矛盾しない（田中1993、山里1995、木下2000）。問題にしたいのは、八重山諸島南端の波照間島・大泊浜貝塚においても、カムイヤキ、古手の滑石製石鍋（瘤つき形状）、白磁玉縁口縁碗・白磁端反碗が沖縄諸島と同様に出土している事実であり、しかもそれらがほぼ同時期の12世紀に登場している事実である（沖縄県教育委員会1986）。先島諸島への遺物の登場に私がこだわるのは、宮古凹地の海域がこの時期初めて越えられ、これを契機に先島諸島と沖縄諸島が同一文化を共有することになるからである。これ以後先島諸島に農耕が定着し、中国陶磁や鉄が供給されてスク時代（沖縄諸島のグスク時代に対応する時代のこと、大濱1999、pp. 137～292）を迎え、まさにこのことが、琉球の国家形成に大きな意味をもつと考えるからである。

想定されるように夜光貝・硫黄・赤木を求める商業集団が存在したとして、はたして彼らが島一つみえない200kmの海域をこえて、はるばる先島諸島にまで行っただろうか。琉球特産の重要な交易品硫黄についても、その最大の産地は、徳之島の西65kmの硫黄島<sup>(15)</sup>であり、薩摩半島の南50kmにも硫黄島<sup>(16)</sup>がある。赤木も、ヤコウガイもたしかに先島諸島に多いが、それ以北の島嶼に十分豊富なのである。しかし実際に人々は沖縄本島から200km進んで宮古島に到達し、さらに100km西の八重山諸島に向ったのである。人を先島諸島に向わせた動機は何に由来していたのだろうか。この事情こそが12世紀の琉球列島に大きな変革をもたらした本質に直結しているように、私には思えるのである。

今回私は、その糸口をヤコウガイ貝殻（以下ヤコウガイと略記）とホラガイ貝殻（以下ホラガイと略記）に求めて、12世紀前後の変化を考察してみることにした。それは以下の理由による：

1. 9世紀から12世紀の大和において、ヤコウガイが高い経済価値をもっていたことが明らかである。ヤコウガイを主たる素材にする螺鈿工芸は、日宋貿易における日本の重要な特産品であり、12世紀に消費のピークを迎える。
2. 10世紀以降の東アジアにおいて、ホラガイも高い経済価値をもっていた。ホラガイは大和の寺院ほか高麗や宋の王室において、仏教法具として珍重された。
3. ヤコウガイもホラガイも、奄美・沖縄諸島のほかに、八重山諸島に豊富である。しかも東アジアにおける産地は琉球列島を除くと非常に限られていた（台湾南部、海南島など）。

私は、この時期商品価値の高くなったヤコウガイ・ホラガイをより多く入手しようとする利潤追求意欲が人々を先島諸島に至らしめ、結果的に沖縄諸島と同様の文化をもたらす契機になったのではないかと考えている。

以下、ヤコウガイとホラガイの需要に注目しながら、琉球列島ならびにこれを取りまく地域の歴史状況を、9世紀から13世紀において論述していきたい。具体的には、9～10世紀、11世紀、12世紀、13世紀にわけて時代の動向を述べ、また各時期においては大和、琉球、ヤコウガイ・ホラガイの需要、琉球と大和の関係について整理しながら上の考えを論証し、いくつかの解釈が提示されている「商業集団」への理解を深めたいと思う。

## 2. 琉球列島をめぐる9世紀・10世紀の歴史状況と考古資料

### (1) 9・10世紀の大和

9・10世紀の大和は平安時代の前半に相当する。中央政権では、天皇の権威が確立し、安定した経済基盤の上に立った貴族政治が実現する。地域支配は地方官である国司に委ねられる一方で、10世紀には各地に荘園が増大し、さらに自ら土地を開墾する有力農民やこれと結びつく新興貴族層が登場して、土地支配の秩序や、律令で定められた国家財政の仕組みはくずれ始める。食生活においては、京都を中心に播鉢が登場し、土師器皿が大量に消費され、土釜、中国陶磁を真似た丹波篠窯産の鉢が普

及して、「中世的食器の原型が王朝都市文化を母胎に創成された」（吉岡1994、p. 311）。10世紀は、「須恵器が食膳用の椀・杯・皿からほぼ撤退し、壺・甕・すり鉢に主力を移す重要な転換期」であった（宇野p. 80）。

外交関係をみてみよう。9世紀前半には、遣唐使、遣新羅使、遣渤海使などの外交使節を国外に派遣しなくなり、舶載品の入手はもっぱら民間商人の活躍に委ねられることになる。唐船、新羅船は大宰府鴻臚館（以下鴻臚館と略記）めざして博多に頻繁に来航し、鴻臚館は公人に対する施設から、私人応対の機関へと性格を転化させていった。京都の諸院、諸宮、諸王臣家ならびに大宰府の富豪たちは、唐物を博多津から競って入手した。おりから宋が建国し（AD960）、貿易を軸とする国際関係が展開することになる。この時期の大宰府で発見される陶磁器には越州窯系青磁が多い<sup>(17)</sup>。

こうした中で、9世紀にはそれまで頻繁に登場していた南島関係記事が記録にほとんどみられなくなる（三島1987）。国家的な外交の門が閉ざされ、内部的に安定した9世紀の貴族政権にとって南島は興味の対象でなくなり、吐喝喇列島以南の地は、律令国家成立期以来再び異郷となっていくのである。

## （2）9・10世紀の琉球

この時期の大和と琉球の関係を示す考古資料がある。池畑耕一の研究によると、これまで奄美大島、喜界島の計6遺跡において、土師器（甕・杯）、「内黒土師器」（椀）、須恵器（甕・壺）、黒色土器（杯）、内面布痕をもつ焼塩土器がみつまっている（池畑1994、1998）。内4遺跡に兼久式土器が伴うことや、黒色土器・焼塩土器（山崎1994）の存在から、これら遺跡の中心的時期を8～9世紀に求めることができる。池畑も指摘するように、杯や椀といった銘々具の存は重要である。個人的な食器・携帯用容器の存在は、これを常用した人間の南下を暗示するからである。内面布痕をもつ焼塩土器も、それが携帯用の堅塩容器とみられる点で注目される。このタイプの焼塩土器は大宰府・北部九州に多く、また大隅・日向南部にもみられる。その分布は琉球列島に及び、奄美大島に集中して沖永良部島、与論島、沖縄本島に達している。池畑はこれを南島に出向く役人の足跡を示すものとしている。このように、8～9世紀には奄美大島を拠点に沖縄本島南部に及ぶ官の足跡を追うことができる。

これに対応する記録がある。大宰府観世音寺不丁地区で出土した8世紀前半に比定される「奄美嶋×」と「伊藍嶋□□×」を記した木簡<sup>(18)</sup>（九州歴史資料館1985、p. 10、52）や、『続日本紀』8世紀前半の記録に複数回登場する「奄美、信覚、球美」、遣唐使船漂着に備えて道標を立てなおしたとする記事、鑑真が漂着した「阿児奈波」の記事（『唐大和上東征伝』）である。しかしこれらは8世紀の状況を伝えるに留まり、9世紀に継続しない。9世紀には大和との往来が激減する印象がある。ところがこの時期、琉球列島にとって大きな変化がおこっている。

那覇市那崎原遺跡で、9～10世紀に比定される畑と、イネ、オオムギ、コムギ、アワ、マメ、畑雑草が検出されている（那覇市教育委員会1996）。当該遺跡は独立丘陵上に広がり、未撈乱の包含層であるⅡ・Ⅲ層下のⅣ層上面において鉄跡群、溝跡群、焼土群等が検出され、焼土のフローテーションによって上記の穀物種子が得られている。遺構を覆うⅢ層からフェンサ下層式土器が単独で出土し、他に9～10世紀に比定される「本土産須恵器」3片、土製勾玉1点、すり石2点が出た。250以上の鉄跡と穀物・畑雑草の検出、これに本土産須恵器と勾玉の伴う点、フェンサ下層式土器の単独出土は重要である。本土産須恵器が9～10世紀に比定されている点とフェンサ下層式の共伴は、時期的にも矛盾はない。

小畑弘己によると、大和の奈良時代末から平安時代において、コムギは、イネ・オオムギやアワを代表とする各種雑穀とセットになって出土する傾向があるという（小畑2000）<sup>(19)</sup>。木村茂光は、8世

紀前半から9世紀前半の大小麦、蕎麦の耕種を奨励する法令記録、承和7(840)年の陸田奨励の官符から、9世紀半ばの政策的畠作の盛行を指摘する(木村1992、pp. 40~60)。小畑と木村の指摘はよく符合しており、奨励された畠作物の実態がコムギ、イネ、オオムギ、アワのセットであったことを教えてくれる。小畑の指摘通り、イネ、オオムギ、コムギ、アワ、マメを栽培した那崎原もまさにこのような大和の動向に対応する現象として理解しうる。那崎原遺跡は、9~10世紀の沖縄本島においてすでに農耕が確実におこなわれ、しかもそれが大和の文化的影響下で実現したことを伝えている。

ところで、この時期大和でほとんど姿を消した勾玉が、しかも土製勾玉が存在するのは注意されている。比較できる資料は少ないが、大宰府の7世紀後半から8世紀初頭の例<sup>(20)</sup>、海の中道の9世紀後半から10世紀の例<sup>(21)</sup>があり(九州歴史資料館1986、朝日新聞社西部本社ほか1993)、これらとの関りを示唆する。

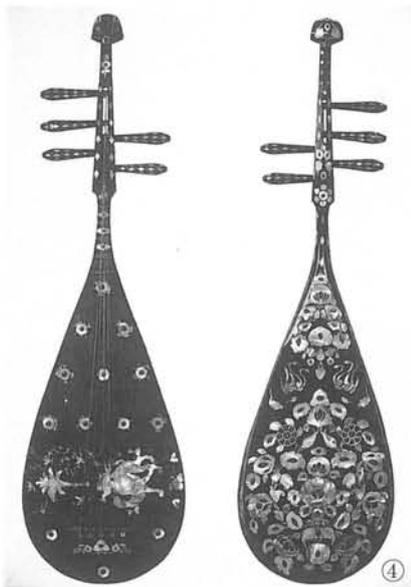
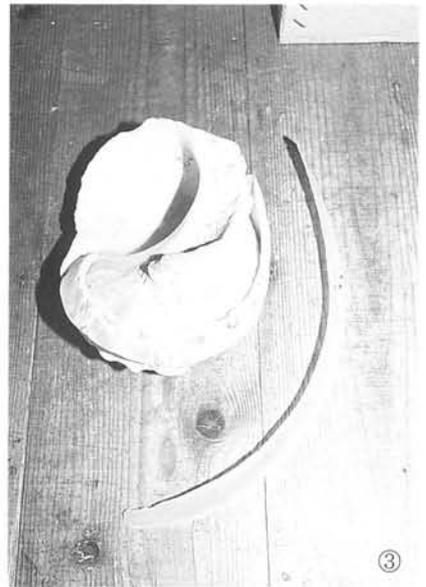
意外なのは、農耕の開始に際して、沖縄在来の食器や調理具にそれ以前とのめだった変化が認められない点である。わずかに3片の須恵器がみられるものの、これが農耕に対応する新たな機能の食器であったとは思えない。9割以上を占めるフェンサ上層式土器は、それ以前のアカジャンガー式土器の無文化が極端に進んだもので、こうした変化はそれ以前から進行していたものである。石器も貝塚時代と変わらない。沖縄の初期農耕は、在地の食生活を変化させずに、徐々に受容されたのであろう。

### (3) ヤコウガイの使用

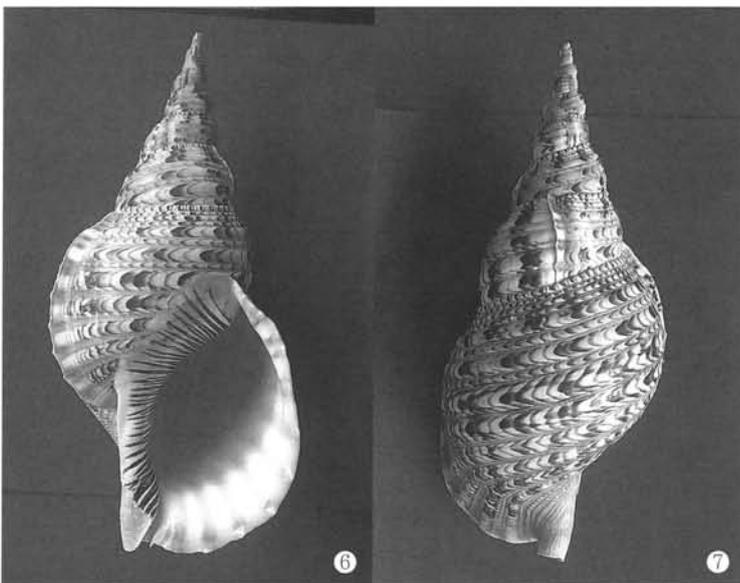
日本におけるヤコウガイを使用した螺鈿は、東大寺正倉院に保管される唐からの請来品をその初現とする(和田ほか1996、米田ほか1999)。請来当時の日本(8世紀)に螺鈿を製作する技術は存在しなかった。ところが晩唐以降の混乱の中で中国の技術は失われていき、その伝統は日本で継承された(10世紀)。この間の状況を螺鈿とその素材であるヤコウガイについて示そう。

螺鈿については中里壽克の以下の研究がある(中里1995)。中里によれば、9~10世紀の螺鈿遺品は稀で、文献を通じて間接的にその存在が知られるにすぎないという。永延2(988)年東大寺僧喬然が中国商人の帰船に弟子2名を便乗させ、宋太宗への表状文と礼物を託すに際し、礼物に「螺鈿花形平函、螺鈿梳函一對、螺鈿書几、螺鈿鞍轡一副」を選択していることが『宋史』15巻491に記されている<sup>(22)</sup>。宋皇帝への献上品であるからには特別念入りなものであったに違いないと中里は述べ、宋の方勺『泊宅編』を引いて、「螺鈿は日本で出来るが、すべての物を極めて精巧に造る」と日本の螺鈿製品が賞賛されていることを示している。さらに『西宮記』、『北山抄』、『本朝世紀』、『仁和寺御室御物実録』にみえる10世紀半ばの螺鈿製品をあげ、「10世紀には正倉院以来の伝統を継ぐ木地螺鈿、漆地螺鈿が行なわれていたこと」を指摘している(中里1995、p. 8)。中里はまた現存するいくつかの10世紀の遺品を参考に、この時期の螺鈿文様が、正倉院の伝統を踏襲していることを検証している。中里の研究によって、10世紀には日本の螺鈿工芸品は中国で賞賛されるほど高い評価を得るまでに成長しており、また日本の貴族の生活に多用されていたことが明らかになった。

螺鈿素材のヤコウガイについて、小島瓊禮、山里純一の研究を参考に9~10世紀の類例をあげてみよう(小島1990、山里1999)。『貞観儀式』(9世紀後半)には「夜久貝壺杯八口」の記述があり、大嘗祭でヤコウガイ製容器の使用されていたことがわかる。賀茂神社の臨時祭に「螺杯」を使用したことが『蔵人式』逸文に記される(9世紀末)。『和名類聚抄』には「夜久之斑貝、今案俗説云紅螺杯出、西海益救島故俗呼為益救貝」と説明される(10世紀前半)。壁に「やく貝をつきまぜて塗りたれば、きらきらとす」とは『宇津保物語』楼上(上)のくぐりである(10世紀後半か)。以上から、9世紀後半の京都の貴族社会には、ヤコウガイが儀式用容器として登場していたことがわかる。また10世紀にはヤコウガイを「斑貝」としてその特徴を正確に記していることから、ヤコウガイ貝殻そ



- ①・② ヤコウガイ *Turbo (Lunatica) marmorata* (Linnaeus)
- ③ ヤコウガイと螺鈿用貝片 (沖縄県宮里清氏漆器工房にて、1993年3月撮影)
- ④ 正倉院螺鈿紫檀五弦琵琶 (宮内庁正倉院事務所ほか2000、p. 19引用)
- ⑤ ④の部分拡大 (井上光貞ほか1980カバー引用)



- ⑥・⑦ ホラガイ *Charonia tritonis* (Linnaeus) 長さ39.4cm
- ⑧ ボウシュウボラ類 (左からトウカイボラ、ナンカイボラ、ボウシュウボラ、左長さ16.8cm)

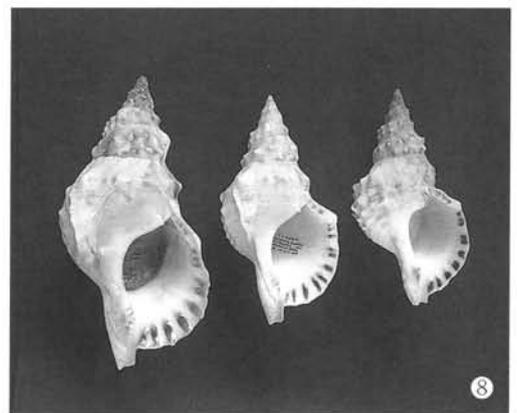


写真1 ヤコウガイ・螺鈿・ホラガイ

のものが都にもたらされていたことも知られる。

すなわち、9世紀後半から10世紀前半の間にヤコウガイはたしかに大和にもたらされ、これを使用した螺鈿工芸技術が発展し、10世紀後半には高い水準に達していたとみることができる。

#### (4) ホラガイの使用

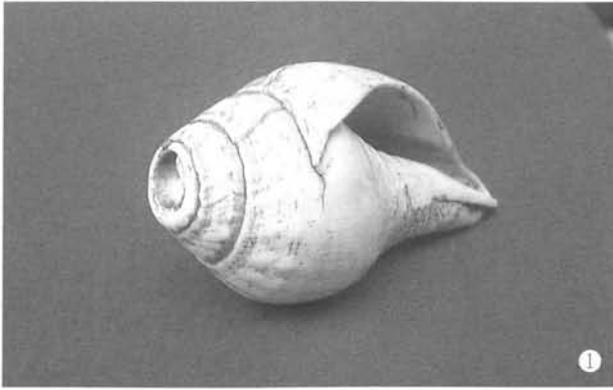
仏教において一定の役割をもつ梵音具<sup>(23)</sup>を法螺、宝螺といい、古来大型の巻貝が使用されてきた。記録に残る日本最古の法螺は、延暦23(804)年、空海が唐清龍寺からもたらしたもので、スリランカ産のシャンクガイを使用したものであった(木下1996a)。その後9世紀後半にかけて、ホラガイとみられる「五色螺」などが入唐留学僧によって齎されたが、遣唐使船が廃止されてからはそれもなくなり、法螺は国内で調達されるようになる。大和近海の大型巻貝で法螺に使用可能なものは、ボウシュウボラの類であり、法隆寺や東大寺に保管される中世の法螺には、これを使用したものが少なくない。これらとともに多く求められたのが、サンゴ礁域に生息するホラガイであった。大きさ、美観、法螺としての機能のともにそろったホラガイが、近海産の貝殻より珍重されたことは想像に難くない(木下1996b)。おりしも9世紀は、法螺を多用する天台密教と真言密教が、護国仏教の中心として貴族社会に深く浸透した時期である。「9世紀の末には宗派の別なく、密教におおわれた観があった」という(速水1993)。

残念なことに9～10世紀のホラガイ製法螺の現物は知られていない。文献でも10世紀末(988年)、先にあげた東大寺僧奄然の宋への礼品の中に「葛籠に納めた法螺二口」として登場するのが唯一の例である。太宗はそれまでの廃仏政策を改め、積極的な保護策をとった皇帝でもあった。奄然の贈った法螺がどんな貝殻であったのか知る由もないが、同時に送られたヤコウガイ製品の存在を考えると、この法螺が琉球列島産の大きなホラガイであった可能性は高い。また、この時期建国した高麗も熱心に仏教を保護した国であった。10世紀の東アジアにおいて、法螺用ホラガイの需要は普遍的であったといえるだろう。

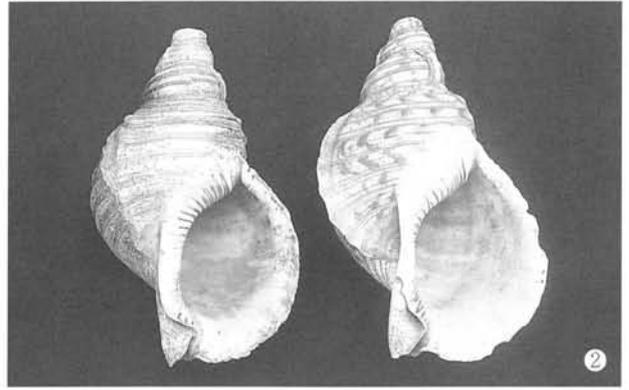
#### (5) 9～10世紀の琉球と大和

9・10世紀、大和では正式な国交が閉ざされていくと同時に、唐・新羅の商船が博多津に集まり、舶載された逸品は、鴻臚館経由で京都の貴族にわたっていた。外国商船は同時に日本の特産品を入手したであろう。その品目は、奄然が宋太宗のために整えた礼物に近い内容であったことが推測される。その礼物には琉球列島特産の赤木、ホラガイ、ヤコウガイを使用した文物があり、ことに螺鈿製品の多さが目立つ。豊富な螺鈿製品の存在は、ヤコウガイの安定した供給があって初めて可能だったことを考慮する必要がある。つまり9～10世紀において、琉球列島は政治的には大和中央と疎遠になるが、大和においてヤコウガイとホラガイの需要は確実に高まっており、経済的にはおそらく大宰府を介して急速に需給関係を深めていたとみていい。

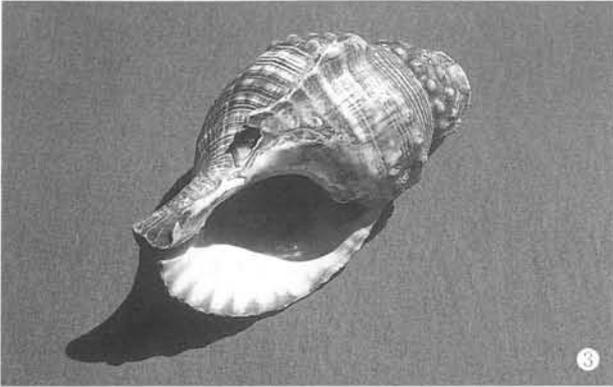
こうした状況は、対応する時期の南島において三つのあり方で示される。一は奄美大島を拠点として沖縄本島に至る行政的人物の南下(8～9世紀)、二は沖縄本島における大和的畑作の開始(9～10世紀)、三は大和との敵対関係である。三については、『小右記』長徳3(997)年に大宰府からの文書として、奄美人による襲撃事件が記されている。それは、奄美の人間が武器をもって筑前、筑後、薩摩、壱岐、対馬に至って土地や家を略奪、放火、人々を殺害し、あちこちで戦って奄美人にも被害者がでたが、国の被害者は300人に及んだ、奄美人は先年にも大隅国の人間400人を奪った、という内容である。記録にのこる8世紀の頻繁な往来や考古資料の存在から、当時の大宰府の役人が奄美を正確に認識していなかったとは考え難いので、この記事はそのまま奄美諸島の人々の行動を指すとみていいだろう。10世紀末の記録は、当時の奄美人に、初めは大隅、次には薩摩から筑前、壱岐、対



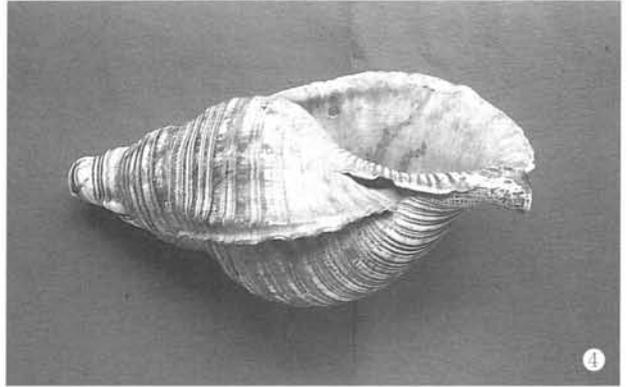
①



②



③



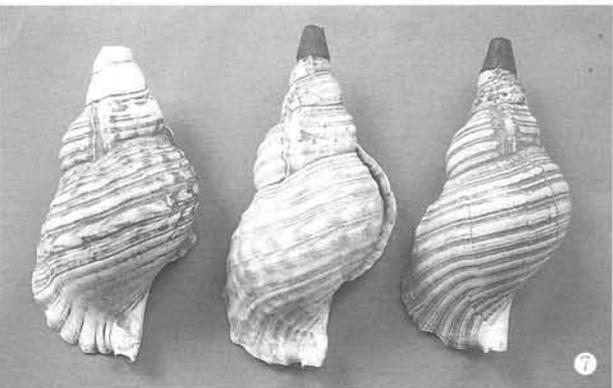
④



⑤



⑥



⑦



⑧

写真2 法螺とホラガイ

① 空海請来の法螺（シャンクガイ、9世紀、東寺蔵）

③ 法螺「尾切」（ボウシュウボラ類、14世紀、東大寺蔵）

⑤ 法螺（ボウシュウボラ類、加元二（1304）年銘、法隆寺蔵）

⑦ 法螺（ホラガイ、法隆寺蔵）

② 法螺（ホラガイ、東寺蔵）

④ 法螺（ホラガイ、東大寺蔵）

⑥ 法螺（ホラガイ、文明十（1478）年銘、法隆寺蔵）

⑧ 法螺を吹く（東大寺森本公誠氏 1994年9月撮影）

馬に至って襲撃せねばならないほど差し迫った敵対状況が、これらの地域との間に生じていたことを物語る。これまでの知見に基づけば、それが南島特産品をめぐる経済関係に原因している可能性は高い。

以上を要するに、9世紀を境に琉球と大和の関係は、記録される政治的關係から記録されない経済的關係に転換する。9世紀以降には高い商品価値をもつヤコウガイ、ホラガイ等が積極的に大和にもたらされたが、やがて両者間に深刻な敵対関係も生む。こうした中で琉球列島に雑穀栽培農耕が定着する。

### 3. 琉球列島をめぐる11世紀の歴史状況と考古資料

#### (1) 11世紀の大和

10世紀終末から11世紀中頃までの摂関盛期を、歴史学では一般に「古代国家の最後の段階」、「11世紀後半からの時期を中世国家成立への胎動期」と捉え、二つの境界となる11世紀中頃を「大きな変革期」とみている(玉井1994、p. 64)。政治的には、刀伊の入寇、平忠常の乱、前九年の役、後三年の役等を通じて武士団が形成され、11世紀末には院政が始まる。この時代はまた「大開墾の時代」でもあり、これをもとに「在地領主制と荘園が展開し始める」(玉井1994、p. 65)のだが、荒地や原野の開発は、「多くはまず畠地化され、その後に水田化される」のが実態であり、前提に畑作の普及があったことが指摘されている(木村1992、p. 17)。食文化では、11世紀半ばが中世的食器<sup>(24)</sup>成立の画期とされ11世紀中頃から12世紀中頃までが、その「中世前期第一段階」と区分されている。この時期は「畿内の瓦器碗や吉備系土師器碗の出現、東播系須恵器、中国製白磁類を中心とする貿易陶磁器が広範に出土するようになる」のが特徴である(橋本1995、p. 10)。

九州でもこうした動向は明確である。大宰府と強い関係をもった8世紀以来の専業漁業集落、海の中道遺跡はこの時期消滅している。古代的な社会が自由な流通経済の中世的世界の前に消えていくのがわかる。鴻臚館での外国との貿易は、亀井明德によるとそれまでの「波打ち際交易」から、宋商人が長期にわたり居住して交易する「住蕃貿易」に、この時期変化する(亀井1986)。博多遺跡群のいくつかの地点で大量の中国陶磁器が発見されているのは、「この地が住蕃宋商人の貿易活動によってもたらされた陶磁器の集積地であり、日本国内への卸問屋の店舗があったことを示している」(亀井1997、p. 81)。博多には住蕃の居留区である大唐街が形成され、「11世紀半ば以降、貿易の拠点、つまり繁栄の中心は、鴻臚館から博多地区に移る」(川添1988、p. 18)。

主要な交易品は中国産の貿易陶磁であった。これらは初めから輸出用として生産された、不特定多数むけの量産陶磁で、11世紀後半には「白磁の洪水」といわれるほど大量の白磁を博多にもたらした(九州歴史資料館2001)。これら白磁は博多の商人を通して全国に流通していくのであるが、必ずしも上物ではなく、博多近辺の一般村落にも広がっていった。「11世紀後半～12世紀前半代の西日本各地」には、「国単位といってよいほど在地の須恵器系窯が稼動していた」(吉岡1994、p. 831)状況の中で、中国陶磁器が豊富に供給された博多周辺にかぎってこうした需要は生まれなかった。

この時期注意されるのは、高麗との往来である。大和と高麗は、11世紀前半まで政治的緊張関係にあったが、同半ば以後徐々に好転し、以後日本商人の高麗への渡海は頻繁になる。11世紀後半、博多の貿易商人と高麗との関係が密接であったことは、『高麗史』の記録が語っている<sup>(25)</sup>。赤司善彦は、11世紀後半を画期にして朝鮮製無釉陶器が博多、鴻臚館、大宰府周辺に流入する状況を明らかにし、これが『高麗史』の記録に対応するものであることを示した(赤司1991)。日本にもたらされた朝鮮製無釉陶器の大半が壺であることから、「何らかの特産品を入れた容器だったのであろう」と赤司は述

べている（赤司1991、p. 66）。

さてこうした記録から、この時期日本の商人がみずから国外に出向いていたことがわかる。亀井明徳は、「11世紀後半から始まるとみられるわが国の交易船は、住蕃商人との混成」であったとする（亀井1997、p. 81）。11世紀後半に、日本商人が交易船をしたてて海外に交易をするようになることは重要である。先に引用した『新猿楽記』の八郎真人は、ちょうどこの時期の人物である。すでに11世紀半ばには蝦夷から奄美にいたる地域の商品の流通が、国内においては彼らによって実現していたのである。

## （2）11世紀の琉球列島

大和の古代から中世への変化を、①土地の開発、②食器の地域・器種分業体制の成立、③市場原理に基づく流通経済の登場とみれば、11世紀の琉球列島に適応するのは②であろう。徳之島伊仙町にカムイヤキ窯が成立するからである。しかし琉球列島にはこの時期を単純に示す遺跡の調査例がなく、その他の実態がよくわかっていない難点がある。③に関しては安里進が「琉球の亀焼商人の活躍」（安里1994、p. 23）を想定している。これについては後段で論じることとし、ここではカムイヤキ窯について述べよう。

カムイヤキ窯は、1984年の発見から調査が断続的に実施され、2001年3月現在11支群100基を上回る数の窯が存在するとされる（伊仙町教育委員会2001、p. 1）。第I支群1号窯焚口の木炭によるC<sup>14</sup>年代が1050±45 y. AD、第II支群6号窯灰原木炭によるC<sup>14</sup>年代が1210±130 y. AD、第II支群3号窯灰原木炭によるC<sup>14</sup>年代が1140±55 y. ADであり、窯床面の熱残留磁器による年代測定でもこの範囲の値を得ている。安里進はカムイヤキをI式からIV式に型式分類し、11世紀から14世紀前半の間に編年した（安里 1991）。安里編年と理化学的年代から、現在カムイヤキは11世紀から14世紀に存在したと理解されている。生産された須恵器は、大小の壺、甕、鉢を主体としており、椀、遅れて播鉢が少数伴う。こうした器種構成においてカムイヤキは日本の中世陶器に類似し、製作技術や形態では高麗産無釉陶器を主とする韓半島陶器に類似することが複数の研究者によって指摘されている（白木原1975、赤司1991、吉岡1994、pp. 163～165）。新里亮人の集成によると、カムイヤキは、北は鹿児島県出水平野から南は与那国・波照間島まで、332の地点に分布する<sup>(26)</sup>。新里はさらにカムイヤキのおもな用途について、それが種籾保存であり、農耕が普及しつつあった琉球列島においては貯蔵容器としての価値があったらと指摘し、その農耕とのかかわりを重視している（新里2002）。すなわちカムイヤキとは、11世紀に徳之島で生産の開始された、中世日本と高麗に起源する壺、甕、鉢を主体とする焼き物で、登場以後短い期間のうちに琉球列島全域に需要され、14世紀まで継続した陶器であった。大和における中世的食器の成立背景には、農業生産力の拡大があり、ことに畠作物の増収がその前提となっていた。琉球列島にも、9・10世紀にすでに雑穀栽培の畠作が定着しているとみられるので、11世紀にも同様の状況が継続し、畠作農耕が島々に順次普及していったと推測することができる。新里も指摘するように、このような食料事情の社会において、カムイヤキが受容されたと考えていいだろう。

安里進はグスク土器に、甕、鉢、羽釜、鍋が揃っていることと、これに滑石製石鍋やカムイヤキが加わって食器を構成する特徴をもつことから、グスク土器を沖縄の中世土器とみなし、10～11世紀に成立したとしている（安里1995）。私は大宰府や博多からの文物の南下は、当該地の状況から11世紀半ばを遡らないとみるのが妥当と考えるので、また「石鍋が商品としての性格をおびる第1の画期は、〔中略〕11世紀後半から12世紀代」とされるので（山本ほか1997、p. 288）、ここでは安里のグスク土器編年案をとらず、11世紀にグスク土器は未だ登場せず、フェンサ上層式土器が継続していたと考

えたい。すなわち、畠作農耕普及途上の琉球列島において人々はカムイヤキを受容したものの、依然伝統的な土器を使用する生活を継続したと考える。フェンサ城貝塚では、第Ⅲ層でフェンサ下層式土器が単純に出土しており（A・Bトレンチ）、これにカムイヤキが伴っている。第Ⅲ層がこの時期に対応していた可能性は高いと思う（友寄ほか1969）。

### （3） 11世紀のヤコウガイ・ホラガイ交易

11世紀、大和における螺鈿は、螺鈿と蒔絵技法が合流した新たな表現様式を獲得して発展する。その代表は、11世紀半ばに完成した京都平等院の須弥壇装飾である。螺鈿工芸が公的な場や生活の中に多く取り入れられたことが文献から窺え、12世紀の螺鈿隆盛の基盤を着実に築いたと中里壽克は述べている（中里、1995、p. 12）。この時期ヤコウガイの杯は寺社の祭礼用容器として定着したらしく、石清水八幡宮の臨時祭における11世紀初めの使用例が、『枕草子』142段、『北山抄』に「螺杯」として登場する。長元2（1029）年には、大隅国藤原良孝が、藤原実資に革製品、赤木などの特産品とともに、「夜久貝五十口」を届けていることから、ヤコウガイそのものが贈答品になっていることがわかる。10世紀以降のヤコウガイ消費は、11世紀にも順調に継続しているとみていいだろう。

ホラガイについてみよう。『高麗史』巻九、『高麗史節要』によると、承暦3（1079）年、「日本商客」藤原等が高麗に至り、法螺30枚、海藻300束を興王寺に施入し、王の長寿を願っている。同じく、寛治7（1093）年、韓半島において海賊船とおぼしき船一艘が、高麗国安西都護府轄下の延平檢軍によって捕まえられた。この船には宋人12名、倭人19名が乗り組み、弓箭、刀劍、甲冑、真珠、硫黄、法螺などのあったことを記している。二つの例は、法螺が11世紀の重要な貿易品であったことを伝えるとともに、船で外海に乗り出した日本商人の姿もよく伝えている。後者の例では、海賊船と間違えられたのだからあまり上品な商人ではなかったらしく、貿易船にもいろいろあったことを教えてくれる。硫黄の存在からみて、これらの法螺の中にも琉球列島産の大きなホラガイがはいっていた可能性は高いと思う。

### （4） 11世紀の琉球と大和

11世紀の琉球列島には、残念ながら調査された遺跡が稀で、生活の状況がよくわかっていないのが現状である。すでに畠作農耕は伝わっているものの、伝統的生活様式に変化は認められず、琉球の文化は貝塚時代の終結とグスク時代の開始にむかってゆっくりと変化しているとみるのが妥当であろう。唯一の大きな変化が、徳之島におけるカムイヤキ窯の操業である。ここでは、なぜ11世紀に、須恵器窯が徳之島に登場したのかを検討しよう。

この時期の大和と琉球間には、ヤコウガイ・ホラガイの需要と供給による経済関係が成立していた。ヤコウガイ・ホラガイは9世紀から10世紀にかけての大和で徐々に需要をのびし、以後も拡大の一途を辿る。これに応じるために、琉球列島から多くの貝殻が北上したことは明らかである。これらの交易は、前述したように8～9世紀の資料に依拠すれば、奄美大島を拠点としていた可能性が高く、その南端は沖縄諸島に及んでいただろう。交易が古墳時代以来の方法——南九州人が貝殻を入手し、中継者を介して消費地に届ける、その対価は穀物を主体とする大和の産物——であれば、鴻臚館の商人が南九州経由で届いた貝殻を入手して京都の貴族や社寺に納品していただろう。貝殻の代償として南島人にわたったのは、穀物や鉄であった可能性が高い。しかし10世紀にはすでに沖縄本島で雑穀栽培が開始され、こうした交易品が成立しにくくなる状況が生じていたはずである。10世紀末には奄美人たちが、大隅、筑紫、壱岐などを襲撃する事件が2度生じている。それまでの大和と奄美との関係を考慮するならば、この事件は交易関係の破綻の表われとみられる。ただ、こうした状況においてもヤ

コウガイ・ホラガイの需要は日々増大したであろうし、その需要を満たすことが、商人の課題となっていたはずである。

11世紀以後、イネ、ムギなどの雑穀栽培が奄美・沖縄諸島にすでに普遍化していたと仮定して、一方で貝殻入手を順調に実現させたい商人が存在した状況を考えてみよう。商人が生産地のこうした変化（農耕化）に目をつけ、これに対応するより効率的な交易物を考えだした可能性は高いだろう。彼らが博多の商人であればすでに銭を使用していた可能性もなくはないが、これが琉球で交換財として効果的であったとは考えられない。ヤコウガイの対価物が当時大和の農村で需要のあった須恵器の壺・甕、すなわちカムイヤキであったとみるのはどうだろうか<sup>(27)</sup>。窯を在地に築くのは、商人が博多に拠った人物であれば、中国陶磁器が豊富な博多周辺で在地産須恵器を入手できなかった状況を反映するとみていいだろう。窯をあえて琉球列島に築いたのは、航海の難所であるトカラ海峡を、陶器を満載した船で横断する危険を避けたためであろう。これはカムイヤキを運ぶ目的地がトカラ海峡以南のサンゴ礁地域に限られていたことを考えると、きわめて合理的な選択といえる<sup>(28)</sup>。その製作技術や形態が高麗産無釉陶器に類似することについては、11世紀後半の博多商人と高麗との間の頻繁な往来に原因していることが想起される。以上から私は、カムイヤキをヤコウガイの対価物と見、その入手手段がカムイヤキ窯の開業であったと考えてみようと思う。東播系窯、十瓶山系窯、勝間田系窯等、西日本の中世窯の開業（吉岡1994）が11世紀半ばであることをみると、これとほぼ軌を一にしたカムイヤキ操業は、琉球に的をしぼった先端的投資事業であったとも考えられる。

窯の場所が徳之島に特定されることについては、どう考えればいだろうか。カムイヤキ窯群を発掘調査した伊藤勝徳は、徳之島に「水・土（粘土）・燃料（薪）の三拍子が揃っていた結果」と述べる（伊仙町教育委員会、p.1）。もっともな理由であるが、私は徳之島が奄美諸島におけるヤコウガイの主産地であることも、理由の一つに加えていいと思う（山口1995、p.68）。中でも徳之島南部にはヤコウガイを多く産する海岸が発達している。カムイヤキ窯群は、南海岸のサンゴ礁をのぞむ山中にあり、ヤコウガイと陶器の積み出しに適しているのである。ただ、一つ北の島である奄美大島でも同様の条件を満たす場所は十分求められたはずなのに、ここが避けられていることに疑問が残る。これについては、10世紀末の大和との関係破綻がその原因の一つではなかったかと思う。

以上から私は、11世紀に琉球列島でおもにヤコウガイを入手する際の交換品として存在したのがカムイヤキであり、そのために徳之島にとくに築かれた窯がカムイヤキ窯であったと考えたい。これらを主導したのは、当時の歴史状況から、博多に拠った商人であったとみるのがもっとも理解しやすい。

### 3. 琉球列島をめぐる12世紀の歴史状況と考古資料

#### (1) 12世紀の大和

12世紀後半は、政治的にみると古代末期の激動期である。武士団が成長して平氏政権が成立し、源平の戦乱を通して、末期には本格的武家政権鎌倉幕府が成立する。農業技術の発展も認められ、「12世紀初頭には水田裏作の開発が確認でき、12世紀中ごろには確実に畠地二毛作が実現されていた」（木村1992、p.29）。流通経済では、国産貯蔵・調理具の海運を介する四大流通圏が全国的規模で成立し、12世紀半ばには中世的流通体制が確立する<sup>(29)</sup>（吉岡1994、p.831）。こうした動きをうけて12世紀後半から13世紀の初めには、中国陶磁・国産の広域流通の貯蔵具・食膳具などが、補完関係として汎全国的に成立し始める（土橋1997）。一方1127年南遷した宋王室は、財政安定を図るために関税収入を増大して輸出を奨励し、浙江、福建、広東、江西などの窯で輸出用陶磁を大量生産した。これらの中国陶磁器が11世紀に引き続いて博多に大量にはいり、貿易陶磁の輸入量は12世紀後期から13世紀に最

大となる。陶磁器は、12世紀後半以降には白磁にかわって青磁が多くなる。「博多およびその周辺では他地域に先駆けて11世紀末～12世紀初めの早い段階に銭の流通が認められ」（小畑1997、p. 97）、博多の都市化が進む。

注目されるのは、この時期博多を中心とした住蕃貿易のほかに、長崎県や有明海、薩摩半島沿岸などに宋船が寄港する小規模貿易が認められるようになる点である（土橋1997、大庭1999）。森克巳は文治5（1189）年幕府御教書を根拠に、12世紀末に島津荘において日宋貿易が確実に行なわれていたことを示し、さらにそれが12世紀前期に遡る可能性のあることを指摘した（森1975）。宋船は硫黄をとりに来ていたのだらうと、永山修一は指摘する（永山1993、p. 448）。鹿児島県金峰町の持躰松遺跡も、宋船の寄港地の一つで、12～13世紀を中心とした貿易陶磁、国産須恵器が出土する。やや内陸の小菌遺跡では、12～13世紀の貿易陶磁に加えてカムイヤキがみつまっている（宮下1999）。12世紀薩摩国武士団の棟梁であった阿多忠景は、その所領の湊を含む部分を大宰府に寄進している。『吾妻鏡』は、阿多忠景が平家在世に勅勘を破り貴海島に逐電したことを伝えている（江平1999）。大宰府に寄進された湊の位地は持躰松遺跡に近い。これらは、大宰府、薩摩半島、琉球列島をつなぐ一連の経済的関係を窺わせる貴重な例である。

12世紀、武家政権成立に向かう政治的激動期の中で、博多の貿易量は最大となり、他地に先駆けて銭貨の使用が始まって博多は都市化していく。宋船が博多以外の九州の湊にも寄港し、小規模な貿易を行なうようになる。

## （2）12世紀の琉球

宋の陶磁器貿易の一端がようやく琉球に及ぶ時期が12世紀である。沖縄本島恩納村熱田遺跡は、この状況をよく示している（沖縄県教育委員会1978）。ハ地区において、白磁玉縁口縁碗、滑石製石鍋、カムイヤキ、グスク土器、刀子、勾玉が同一層から出土した。調査者の金武正紀は、白磁玉縁口縁碗の編年的位地づけを検討して、これらを11世紀末から12世紀初頭に比定している。金武は沖縄出土の中国陶磁器を基準に、11世紀末～12世紀前半、12世紀後半～13世紀、14世紀～16世紀の3時期を設定し、それぞれグスク時代への胎動期（Ⅰ期）、グスク時代前夜（Ⅱ期）、グスク時代（Ⅲ期）とした（金武1998）。このⅠ期の遺跡は、現在先島諸島を含む30数カ所確認されているが、銘苅原の68点、ヒヤジョー毛の60点以外は、いずれも10破片程度の出土であるという（金武2001、p. 99、那覇市教育委員会1994、1997）。

注意されるのは、白磁とともにカムイヤキ、滑石製石鍋、刀子、勾玉が出土している点である。滑石製石鍋、鉄製刀子、石製勾玉はともに同時期の和に認められる文物である。また竹富島の新里村西（1986年調査）の白磁玉縁口縁碗、波照間島の大泊浜（沖縄県教育委員会1986）の褐釉陶器壺、白磁玉縁口縁碗、白磁端反碗、古手の滑石製石鍋、カムイヤキの出土は、Ⅰ期の遺跡の広がり八重山諸島に及んでいることを明確に示す。

一連の文物が及んだ地域において、在地土器に大きな変化が生じている。沖縄諸島では11世紀末から12世紀初頭にグスク土器、八重山諸島では12世紀に新里村式・ピロースク式土器（金武1991、1994）がそれぞれ誕生している。グスク土器は、広い平底の甕、鉢、平底に近い丸底の壺、滑石製石鍋を模倣した形状の鍋が主体で、中には白磁玉縁口縁碗を模倣したものもあり、土器はすべて完全に無文化していることを特徴とする。新里村式は古手の滑石製石鍋を模倣した鍋である。ピロースク式土器は口縁部が「く」字状に外反する広い平底の鍋または甕である。因みに宮古諸島ではやや遅れて八重山諸島の土器に類似した野城式土器（下地1978、1996、1998）が13世紀に登場する。これらは、カムイヤキ、中国陶磁器と組み合せて食器セットを構成すること、「貯蔵・調理・食膳の各自用途を通じて、

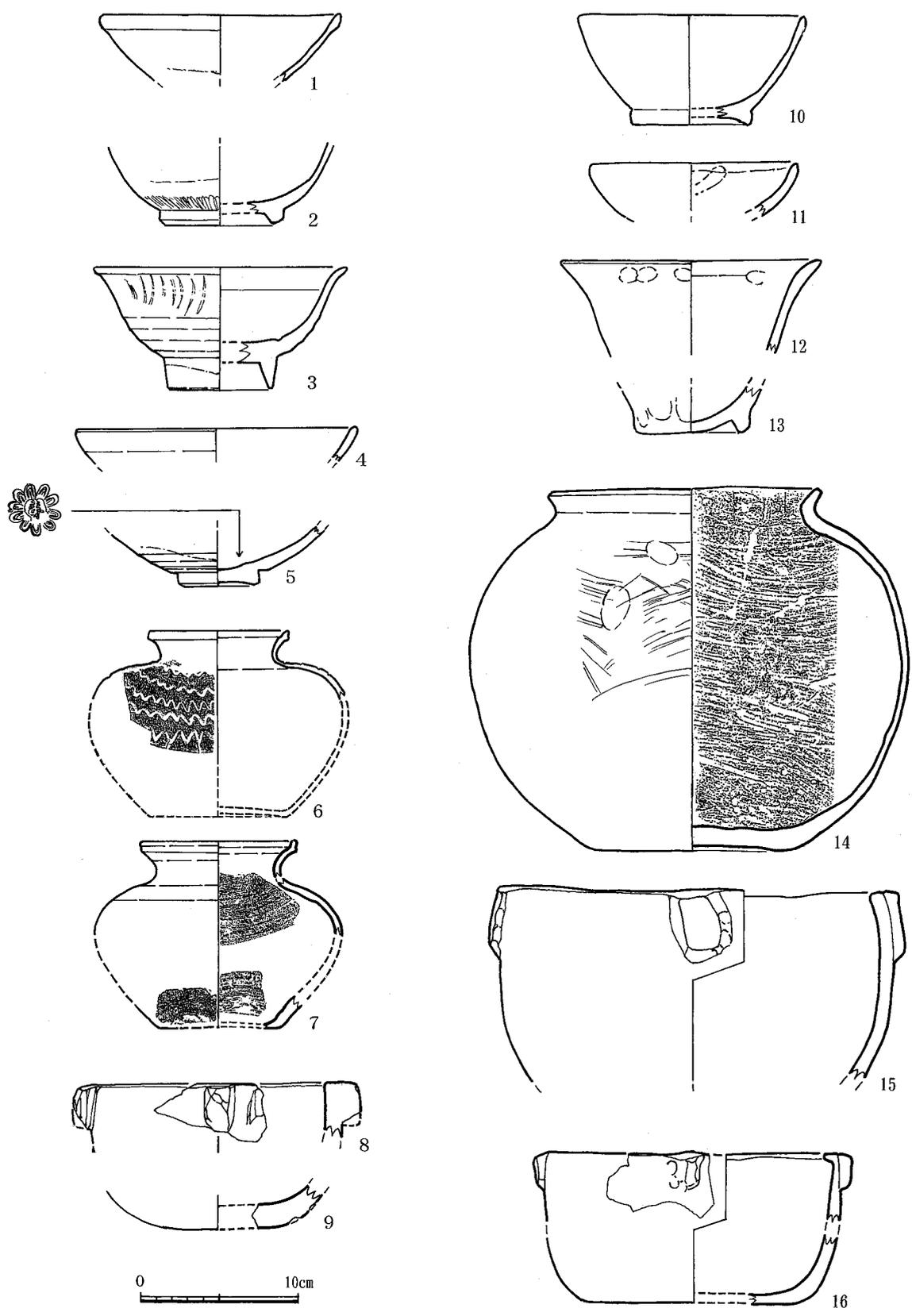


図2 グスク時代前半の食器（那覇市銘苅原遺跡出土）

1：白磁玉縁口縁碗、2：白磁薄手直口碗、3：白磁端反碗、4・5：白磁ビロースクタイプ碗、6・7：カムイヤキ壺、8・9：滑石製石鍋、10～16：グスク土器

写しの体系」(宇野1997, p. 377)が認められることからみて、大和の中世食器の特徴を継承しており、白磁、カムイヤキ、滑石製石鍋が琉球列島に登場したことに原因して新たに登場した在地土器とみることができる。

こうした動きは当該時期の遺物・歴史状況からみて、博多を起点として九州から南下した文化現象とみるのが最も矛盾なく、奄美諸島の状況が現在不明ではあるが、大局的には、北から順次食器の中世化を果たしながら先島諸島まで伝わったとみることができる。ことに先島諸島では、それまで1000年に及んで土器を用いない生活が継続していたため、この文化伝播の意味はきわめて大きいといわねばならない。

沖縄諸島のグスク土器と、それ以前の貝塚時代後期土器(フェンサ下層式土器)との関係をみてみよう。11世紀にカムイヤキと共存していた後期土器は、11世紀末以降グスク土器が新たに登場しても存続し、グスク土器と共存しながら次第に少なくなって、14世紀には姿を消すと考えられる。那覇市ヒヤジョー毛や佐敷町下代原(佐敷町教育委員会2001)、宜野湾市伊佐前原第一(宜野湾市教育委員会1998)などはこのことを示している。つまり、グスク土器は在来の土器が変化して登場したのではなく、これとは不整合に、別個に登場した食器セットだと理解できるのである。両者が長期間共存すること、また11世紀には後期土器とカムイヤキが共存していたことからみて、沖縄諸島の人々は、新たに白磁、滑石製石鍋を受容してこれに付随する中世的食器文化を自ら創出しても、伝統的土器をしばらく作りつづけたことが知られる。この時期には、久米島など離島に至るまで農耕が広がっており(安里進1975)、こうした中世的食器セットを受容する素地が全島に普遍化していたとみることができる。ただ、沖縄諸島のグスク土器には、当該時期の大和にみるような杯・小皿・高台付椀の3点セットが欠落しており、これが後者との大きな違いとなっている。

### (3) 12世紀のヤコウガイ・ホラガイ消費

12世紀は大和の螺鈿消費の最盛期である。「12世紀に至って螺鈿の需要は飛躍的に増え、それに伴って技術も〔中略〕高度に発達した」とされる(中里1995, p. 26)。螺鈿工芸品は、貿易品としても重要な位置を占めた。この時代のヤコウガイ大量消費の代表は12世紀前半(1126年)に落成した平泉中尊寺の金色堂内陣を飾る螺鈿である。奥州藤原氏の財力表出の一つであるこの堂の完成のために、4万個の良質なヤコウガイが使用されたと推定されている。その螺鈿は貝片を接ぎ合わせて表現せずに「一枚貝にこだわった」ものが多く、背後に潤沢なヤコウガイの供給があったことを中里壽克が指摘している(中里1996, p. 22)。12世紀前半の金色堂内陣完成にむけて、その初頭には膨大な数量のヤコウガイが取引されていたに違いない。

これに対し、ホラガイの消費状況は依然間接的に把握するに留まる。『二月堂修中練行衆日記』<sup>(30)</sup>(1158)<sup>(31)</sup>、『永治二年真言院御修法記』<sup>(32)</sup>(1142)、『養和二年後七日御修法記』<sup>(33)</sup>(1182)、『文治五年己酉真言院御修法胎蔵界日記』<sup>(34)</sup>(1189)などの記録において、密教の儀式で法螺が儀式に不可欠な楽器であったことを知る。ホラガイの需要が継続していたことは確かである。

### (4) 12世紀の琉球と大和

琉球列島の12世紀は、南島貿易用カムイヤキと、選択された貿易陶磁、滑石製石鍋、鉄製品をたずさえた大和の商人が、琉球列島に積極的に進出して貝交易を行なう時期であった。もたらされた鍋、壺、甕、鉢は琉球の社会に適合して急速にその食器文化を変化させ、またヤコウガイ・ホラガイは大量に大和に運ばれて、多くの高級螺鈿工芸品を生み、華麗な金色堂を奥州に誕生させた。12世紀には大和と琉球の往来が、それまでになく頻繁であったと推測される。琉球へは交易品ばかりでなく、その周辺の食文化や大和の進んだ農業技術が伝えられ、琉球列島の生産力を向上させたであろう。

11世紀後半から12世紀前半の奄美大島において、カムイヤキ、中国陶磁器とともにヤコウガイのみ見つかった例がある。1965年、名瀬市小湊の古墓群が工事中に発見され、そこから白磁小形玉縁碗や黒釉碗、褐釉四耳壺などとともに、カムイヤキ壺1、ヤコウガイが一括して見つかった<sup>(35)</sup>（亀井1993、p. 41）。中国陶磁器とカムイヤキとヤコウガイをたずさえて動いた大和商人の墓であろうか、小湊の古墓群は、そうした人々の拠点の一つが奄美大島にあったことを示す貴重な例である。

12世紀のヤコウガイ消費の増大が大和の商人たちの活動範囲を拡大させ、その先端が先島諸島に至ったとする推定は、こうした歴史状況からみて矛盾はない。八重山諸島の石垣島、与那国島はヤコウガイの豊富な島である。商人たちが島に至った時、これらの島々には土器を用いぬ先史時代以来の生活が続いていたはずである。そこに沖縄諸島と同様の交易品がもたらされ、おそらく雑穀栽培も同時に伝えられたのであろう。先島諸島への航海には通訳として沖縄諸島の間人も加わっていたに違いないので、彼らを通して沖縄諸島と同様の生活様式が伝えられていったと想像される。この時期の遺跡は沖縄本島で現在39確認されており、そのすべてがグスク土器を使い、74%が製鉄あるいは鉄製品を伴い、18%で穀物が発見されている（手塚2000、pp. 308～309）。先島諸島にも陶磁器、滑石製石鍋、カムイヤキ、グスク土器、穀物栽培、鉄製品がもたらされたことは、大泊浜遺跡やこれに後続する遺跡が証明している。

安里進はこうした商人を「亀焼商人」と呼び、彼らを琉球の人間だったと考えて、その背後に窯業生産集団を管理・統率する政治的統率者の存在を想定している。私は以上から商人たちは博多に拠った人間であった可能性が高く、またカムイヤキ生産者は彼らのもとで経済原理によって統括されていたと考えている。池田榮史は12世紀については南宋の中国商業集団の存在を想定したが、その登場は次の段階まで下るのではないかと思う。商人の問題に関しては、その主体が九州にかかわるとした金武正紀や亀井明徳の考えに同意したい。沖縄諸島や先島諸島に至った商人たちは、博多を根拠地とする大型船の所有者で、徳之島にカムイヤキ窯を経営し、ヤコウガイやホラガイ、あるいはこれに硫黄や赤木を加えた南島の産物を入手した商人のグループではなかったかと考えたい。薩摩半島西岸の阿多氏の湊が大宰府と係わりをもっていたのは、こうした商人の動きと無関係ではなかっただろう。湊に対応する消費集落の小菌遺跡にカムイヤキのあることは、このように考えると理解しやすい。

琉球に至った商人が、推定するように博多の商人であったとすると、彼等はこの時期すでに銭貨を使用していた可能性が高く、彼等が琉球でも銭貨を使用したかが問題になる。これについては、12世紀の琉球列島で銭貨が見つからないこと、ヤコウガイを入手するためにカムイヤキを開業させたとみる仮定において、その可能性は非常に低いと思う。

#### 4. 琉球列島をめぐる13世紀の歴史状況と考古資料

##### (1) 13世紀の大和

平安時代後期から鎌倉時代中期にかけては、「日本史上とくに非集権的な時代であった」（村井1986、p. 263）とされるが、執権政治が確立し最初の武家法典が制定されて、幕府の朝廷にたいする政治的優位が達成されると、鎌倉が京都にかかわって求心力を持ち始め、13世紀後半にはモンゴルの脅威に対応した臨戦体制を通して、北条一族への集権化が進む。しかし緊迫した政治状況とは対照的に、元寇前後の「『唐船』の往来、『唐物』『唐人』の流入はきわめて活発であった」（網野1994、p. 234）。13世紀、東西ユーラシアにまたがる大国をつくりあげた元において、東西の海陸交通は活発化し、江南の富と全国的な物資流通が中国に大都市を出現させた。亀井明徳は13世紀を、「1極ラジアル（放射線）型」の陶磁貿易から「多極クロス（交差線）型」の貿易に推移する変換の時期とみている（亀

井1997、p. 78)。すなわち前者の場合、日本へ輸出される中国各地の陶磁器は明州一箇所に集められ、ここから直線的に博多津・鴻臚館に運ばれていた。これに対し後者では、前世紀に勃興した福建、広東、江西の窯や竜泉窯に至便な輸出港・市舶司<sup>(36)</sup>が増設されて、輸出入の航路が多極化する。13世紀は後者の時代であった。

ところで薩摩半島南端の河辺郡は、当時幕府得宗家の所領であり、千竈氏という武士が地頭代官として治めていた。千竈家の所領を7人に分譲する際に作成した証文が「千竈時家処分状」（嘉元4（1306）年）としてのこっており、そこから千竈家の支配が当時徳之島に及んでいたことを知る（村井1997）。千竈家の所領は万之瀬川流域に分布しており、前代から大宰府と琉球を中継してきた湊である持躰松遺跡もその所領に含まれていた可能性が高い。ここが幕府得宗家の所領である以上、当然博多との密接な関係は継続していたと考えられる。当時の徳之島では、カムイヤキが操業中なので、私の予想するように、カムイヤキ窯が博多の商人グループによって経営されているものであれば、その中継地をおさえる千竈家の領有権が徳之島に届くのは理解しやすい。

## （2）13世紀の琉球

13世紀の琉球では、沖縄・奄美ともに積み石をとまなうグスクが登場し、グスク時代が始まる。「グスク最下層から出土する輸入陶磁器のほとんどが13世紀から14世紀に集中する傾向を示し」、この時期がグスク建築の開始期であることを伝えている（當真1985、p. 21）。沖縄本島では屋良グスク、ヒニグスク、勝連グスク、浦添グスクが登場し、當真嗣一はこれらを成立期のグスクに分類している<sup>(37)</sup>。集落遺跡では稲福遺跡、伊波後原遺跡、我謝遺跡が知られる（當真1985）。

これらの遺跡では、青磁櫛目文碗・皿、青磁劃花文碗、白磁口禿碗・皿、褐釉陶器鉢・四耳壺、青白磁合子、カムイヤキ、グスク土器、土製勾玉、ガラス丸玉、土錘、骨製鎌、鉄鎌、刀子、鉄釘等鉄製品、鏡、簪などの青銅製品、石皿、敲石などの石器が出土している。白磁にかわって青磁が増え、滑石製石鍋が減り、武器や装身具の登場している点が注目される。陶磁器の変化は博多の動向に対応しているが、滑石製石鍋が減り他の製品が登場している点では、沖縄側の選択的かつ積極的な文物受容の姿勢を読み取ることができる。

奄美諸島においても、12、3世紀にグスクが登場する。最近の調査によって、奄美大島笠利町のウーバルグスク、万屋グスク、用安湊グスク、ダンベ山で、道、池のまわりにサンゴを敷きならべた庭園、曲輪と建物、鍛冶跡などが検出され、出土した青磁、白磁によって12、3世紀を上限とするグスクであることが検証されつつある（笠利町教育委員会1993a、1993b、1997、中山1999）。名瀬市でも悉皆的分布調査によって、多くのグスクが発見されている（名瀬市教育委員会2001）。名嘉正八郎、知念勇は奄美と沖縄のグスクはともに12世紀後半から13世紀に現われたと早く指摘したが、中山清美は調査成果から奄美がやや先行するとみている（名嘉ほか1985、中山1999、p. 244）。

奄美大島宇検村倉木崎では、中国陶磁器を積んだ沈没船の積荷が、幅500mに満たない海峡の底で多数みつがっている。調査概報によると、海底から引き上げられた陶磁は、竜泉窯系青磁、同安窯系青磁、福建省系白磁、潮州窯系青磁、景德鎮窯青白磁、泉州窯系褐釉陶磁、褐釉壺などで、おおむね12世紀後半から13世紀のものだという（宇検村教育委員会1998）。この時期のグスクと時期的に対応するが、沈没船そのものや陶磁器以外の遺物はまだみつがっていないようである。

13世紀後半、ピロースクタイプとよばれる白磁碗が琉球列島に登場する。これは石垣島ピロースク遺跡第Ⅱ層出土の内彎型白磁碗を標識とし、金武正紀によって設定された型式である<sup>(38)</sup>。金武はその時期を13世紀末から14世紀後半に比定している<sup>(39)</sup>（金武1988）。ピロースクタイプ白磁碗は、現在までのところ沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島を中心に、大宰府、熊本、草戸千軒、尾道にも分布

するが、「きわめて小数で、まとまった量を出す遺跡は現在沖縄に限られる」（山本1995、p. 483）という。新里亮人はカムイヤキの分析から、カムイヤキ生産の画期が13世紀後半にあることを析出し、さらにピロースクタイプ白磁碗出現と、石積みグスクの軌を一にすることに注目して、この時期北からの経済的動きが南からの動きに転換し、グスクの独自性が顕著になるという重要な指摘をおこなっている（新里2002）。

13世紀、沖縄と奄美にはグスクが登場して、島外文物の選択的かつ積極的な受容が行なわれ、琉球列島に特有の貿易陶磁器がみられるようになる。こうした現象は前代と明らかに異なるものであり、琉球列島に文化的個性が確立し、人々が独自の歩みを始めたことを物語っている。

### （3）13世紀のヤコウガイ・ホラガイ消費

13世紀の螺鈿は、それまでの正倉院の伝統を引いたヤコウガイ中心のものから急激に変化して、アワビ中心の螺鈿に変化し、「驚くべき技術中心の雰囲気を充満」させる工芸品となる（中里1996、p. 26）。具体的には2mmほどの厚さのヤコウガイ片の使用が、0.5mmほどの薄さの貝片使用に変化し、素材がヤコウガイからアワビに変化すると、中里壽克は述べている（中里1995）。13世紀にヤコウガイの需要が激減したであろうことは、想像に難くない。

法螺の需要は、前代と同様密教寺院を中心に継続していたことが、『醍醐寺三寶院并遍智院灌頂道具絵佐原真寸尺等』<sup>(40)</sup> や東大寺『二月堂修中練行衆日記』によって認められる。加えて鎌倉時代中期から室町時代、熊野三山、羽黒山、日光山、英彦山、白山、六郷満山などによった修験集団が、全国的に成立したことも注意される。この時期、修験道独自の灌頂法や山伏十六道具といわれる峰入りの法具が定まり、法螺は錫杖、笈、頭巾などとともに山伏必携の道具となる。ホラガイ消費の増加が推定されるのである。

### （4）13世紀の琉球と大和

13世紀の琉球と大和の交易関係は、ヤコウガイ消費の落ち込むのに伴い、次第に冷却したであろう。大和の消費に応えカムイヤキや石鍋、鉄製品を載せて南下する商船は13世紀にはおそらく姿を消し、大和からはホラガイなどの需要を満たすための船が往来しただろう。この時期の琉球にとって意味をもつのは、日本との往来でなく、むしろ亀井明徳の指摘した東中国海における陶磁貿易の一極化から多極化への変化である。南中国を発して東中国海を横断する貿易船が多くなれば、それが博多を目指していても、その中間に柵のように並ぶ琉球列島に接触する機会は増えたはずだからである。池田榮史の指摘するように、中国船の偶然の寄港地になったかもしれず、奄美大島倉木崎のように付近で座礁する貿易船が出現したかもしれない。ましてや徳之島の西65kmには硫黄の大産地があり、中国商船が直接来航する理由が存在する。森村健一は、12世紀末から13世紀前半の中国福建省沿岸部の白磁玉縁碗に注目して、この時期すでに中国東南沿岸の港から台湾経由で琉球に至る交易ルートが存在したとする（森村1998）。13世紀後半以降、琉球列島に集中的にもたらされるピロースクタイプ白磁碗は、このような東中国海を東西に横断する動きを反映するものであろう。ピロースクタイプ白磁碗は、「産地は明らかではないが中国南方の可能性はある」（山本1995、p. 483）とされ、金武正紀も泉州港に近い福建省南部の窯で類似の白磁が生産されていると指摘する<sup>(41)</sup>。いずれにしても、13世紀には中国商船が琉球列島に直接来航する機会があったと考えられるのである。

琉球列島ではこの時期すでに農業生産力を基盤にグスクが築かれており、社会が階層化していた可能性が高い。独自の文化的個性を確立した琉球の社会において、実力をつけつつあった当時のリーダーたちが、鉄や技術、政治情報、経済的知識を求めて中国商人や大和の商人と接触し、東アジア経済圏に積極的にはいつていった可能性は十分にある。この時期文献はようやく王国史を語り始め、按司

たちが具体的な姿を現す。1260年、浦添に英祖王が即位し、その後久米、慶良間、伊平屋、大島諸島が中山に入貢したことを『中山世鑑』が記している。

## おわりに

以上、おもに大和のヤコウガイ需要を通して、9世紀から13世紀の琉球列島の歴史動向を考察した。小論の主張は、大和における螺鈿素材としてのヤコウガイ需要の高まりが博多の商人の注意を琉球列島に向けさせ、その交易品生産のために徳之島に須恵器窯を開業させ、貝殻の仕入先を先島諸島までひろげさせたので、交易文物が琉球列島全域にゆきわたり、その結果共通した畑作中心の農耕が列島に展開し、社会の階層化が進んで、ヤコウガイ交易収束後の13世紀後半、琉球は自力で対東アジア交易を開始するに至ったというものである。論じた内容は貝殻で語るには大きすぎ、また一種の貝殻ですべてを解釈できるものでもなく、小論が対象の一端をかすめたにすぎないことを了解している。ただこの時期いささかの意味をなすと予測したヤコウガイ交易の視点から、9～13世紀の琉球史を描いてみたいと思ったのである。大方のご叱正を乞いたい。

拙論執筆に際して、亀井明德、甲元眞之、池田榮史、池畑耕一、稲葉継陽、小畑弘己、新里亮人、杉井健、山村信榮、山崎純男の各氏からご教示、ならびに資料収への助言をいただきました。末筆ながら記して感謝いたします。

## (注)

- (1)奄美諸島から八重山諸島にいたる文化的共通性の強い圏域をいう。15世紀以降は琉球王国の版図に重なる。文化圏概念に対応する呼称として、安里嗣淳が初めて使用した(安里1991)。
- (2)宮古凹地とは、沖縄島と宮古島間にある長さ約200km、水深約1000mの海底の陥没地形をいう。近年慶良間海裂と呼称されている(河名2001)。この間に島は存在しない。
- (3)カムイヤキとは、徳之島伊仙町のカムイヤキ古窯群において11世紀から14世紀にかけて生産された、還元焰焼成による硬質の陶器をいう。類須恵器(白木原和美による)、亀焼(安里進による)、南島須恵器(大西智和による)ともいう。
- (4)滑石製石鍋とは、鍋や羽釜の形をした煮沸具で、古代末から中世前半期の西日本で流行する石製の容器である。琉球列島で出土する石鍋の多くは長崎県西彼杵産とされる。詳しくは本書新里論文を参照されたい。
- (5)古琉球とは、グスク時代から琉球王国成立、1609年の島津侵入事件に至るおよそ500年間の琉球をさす。
- (6)いずれも琉球史の基本書。『中山世鑑』は向象賢羽地按司朝秀が1650年に著した沖縄最初の歴史書、『中山世譜』は蔡温が1725年に記したもの、『球陽』は鄭秉哲が1745年に著したもの。
- (7)アマミキョ、天孫氏とよばれる人々が北から南下して琉球列島に定着し、農耕を広め、やがて舜天、英祖、察度など伝説の英雄に継続するという見方。伊波普猷、加藤吾三、比嘉春潮、宮城榮昌、外間守善などによって説かれ、琉球の古代に対する一般的解釈であった。
- (8)グスクとは、12世紀後半から16世紀前半の琉球列島において構築された、石積みの城壁や石垣囲いをもつ独自の構築物をいう。一般に、農村を基盤として群雄割拠した按司とよばれる領主的豪族層が、主として防御を目的として築いた城と理解されている。1992年現在沖縄諸島だけで223箇所が確認されている。これに奄美諸島のグスクを加えるとその数は300を越える数になるだろう(沖縄県立博物館友の会1992、「琉球王国のグスクおよび関連遺産群」世界遺産登録記念事業実行委員会2001)。
- (9)友寄英一郎・嵩元政秀1969文献、p. 71

- (10) フェンサ上層式土器とは、平底の甕、鉢、壺、鍋の組み合わせグスク土器の一型式である。フェンサ下層式土器より硬質。
- (11) フェンサ下層式土器とは、くびれ平底甕と丸底壺が組み合わせる土器型式で、貝塚後期土器の最後に位置付けられている土器である。
- (12) 時期比定において安里が基本的に依拠するのは、森田勉による石鍋の1983年の編年である。森田は石鍋A群（瘤つきの古いタイプ）を、海の中道遺跡例などに拠って、その盛行期を10～11世紀としている。安里はさらに、海の中道遺跡の貝塚において10世紀の貝層からサンゴの堆積が検出されていることに注目し、これらが琉球列島からもちこまれたものと解して、10世紀における北部九州と琉球列島の往来を想定した。その後、資料の増加により石鍋の所属時期がより明らかになり、山本信夫・山村信榮、木戸雅寿らの研究では、石鍋Aの出現時期は11世紀前後に比定されている（山本・山村1997、木戸1995）。また安里は石鍋模倣土器が、石鍋の新旧を忠実に再現しているため、石鍋そのものの時期的序列に混在はないと解釈するが、筑紫野市西小田A地区では、12世紀に比定されるSH1遺構において、古いタイプとされる瘤つきの滑石製石鍋と新しいタイプの罌つきの石鍋が共存している（筑紫野市教育委員会1985、pp. 39～44）。こうした例は他にもみられる（福岡市教育委員会1972、九州歴史資料館1990など）。これは新旧の石鍋の変化が連続的であり、両型式がしばしば同時期に併用されていたことを示している。したがって琉球列島で同様の現象がおこっても不思議ではない。海の中道遺跡でサンゴと報告された石灰質のものは、1993年の第4次調査報告書において藻塩焼の海藻に付着したコケムシであったことがわかった（福岡市教育委員会1982、p. 27、152、朝日新聞社西部本社ほか1993、p. 119）。発掘担当者の山崎純男によると、それでもサンゴは数点混在していたそうであるが、サンゴは九州西海岸の諸所に認められるので、その存在を琉球列島にあえて結びつける必然性はない。また安里は農耕の開始を12世紀に比定したが、1992年には那覇市那崎原遺跡で、イネ、オオムギ、コムギ等の種子と畑が検出され、農耕の上限が9～10世紀に遡ることがわかった。ただ、上記のことは安里が立論した段階では未知の事実であった。
- (13) 八郎真人とは、11世紀半ば、藤原明衡によって書かれたとされる漢文の随筆『新猿楽記』に登場する人物。八郎真人は欲深い商人の主領で、「利を重んじて妻子を知らず」、その足跡は「俘囚の地」（蝦夷）から「貴賀が嶋」（喜界島）におよび、各地の物産を集めて「財宝を波頭の上に貯え、浮沈を風の前に任せて」世を渡り、その扱う品々には南中国の物産、陶磁器、高麗の織物、真珠、赤木、ヤコウガイなど「交易の物、売買の種、称げて数ふべからず」と記される。11世紀中頃の商人のあり様をよく示しており、この時代の商人を代表する貴重な人物である。
- (14) 金武の考えに対して、亀井明徳は琉球列島と中国との直接貿易である可能性が高いとした（亀井1986）が、1993年の論文では13世紀代については「九州本土と南西諸島を直接ないし中継して結ぶ交易船が来往する形態」が妥当だとして、金武と同じ考えを示している（亀井1993、p. 29）。
- (15) 硫黄島は、現在沖縄県久米島の具志川村に属する無人島である。面積2.6平方キロの小島であるが、琉球王国時代を通して明への貢物の産地として重要な位置を占めたことが、記録にのこされている。硫黄は医薬品ともなるが、もっぱら火薬の原料として重要視された。
- (16) 12世紀半ば頃に宋船が島津庄に来航し、硫黄島の硫黄を交易したという指摘がある（永山1993、p. 455）。
- (17) 以上は、次の文献を参考にした。川添1988、石井1993、笹山1993、九州歴史資料館2001。
- (18) それぞれ奄美大島、沖永良部島を指すとされる（三島1987）
- (19) 九州においてこれまで知られる畑作物の検出例を以下にあげる。（西原段Ⅱは清水1998、その他は下山ほか2000に拠った）

畑の遺跡	時期	遺構	検出された栽培植物
福岡県北九州市・御座・第1地点	10世紀	畝、溝	イネ、キビ属
福岡県福岡市・立花寺B・2/3次	10～12世紀		ソバ、アブラナ科、ナス、ゴマ
福岡県福岡市・梅林	平安時代		ソバ
宮崎県西諸県郡・川除	古代	溝	イネ
鹿児島県指宿市・橋牟礼川	874年	畝、溝	イネ、キビ、ジュツダマ属
鹿児島県指宿市・敷領	874年	畝	イネ、ヒエ属、ジュツダマ属
鹿児島県曾於郡・西原段Ⅱ	9世紀後半～11世紀末	水田	畑として陸稲を栽培していた可能性あり

- (20) 大宰府SB2825、8世紀後半以前の建物跡で、滑石製の勾玉が1個出土している。大きさ、形状ともに那岐原に似る。
- (21) V調査区で出土する。ここからは少量の3～4世紀の製塩土器、多量の9世紀後半～10世紀初頭の土器がでてくる。勾玉の所属はこれらのどちらかになるが、その形状からみて3～4世紀ではあり得ず、私は後者の可能性が高いとみている。
- (22) 献上品には、以下のものがある：青木に納めた仏経、螺鈿花形平函に納めた琥珀・青紅白の念珠など、毛籠に納めた螺杯二口、葛籠に納めた法螺二口、染皮二十枚、金銀蒔絵筥に納めた表状など、金銀蒔絵硯筥に納めた硯、墨、水瓶など、金銀蒔絵扇筥に納めた檜扇二十枚など、螺鈿梳筥に納めた赤木梳二百七十など、螺鈿書案、金銀蒔絵平筥に納めた細布、他五件。
- (23) 法螺は以下のために吹くとされる：「応唱」、「一切諸天を招呼」するため、法会の楽器として音を奏するため、「一切衆生の罪を消滅させ、覚悟させるため」、「仏号を宣布して悪魔を払う」ため、正覚位の証として受けるため。
- (24) 中世的食器の特徴は、用途ごとに器種別分業生産されていることである。具体的には、在地で生産される椀・皿、鍋・釜などの供膳具・煮炊具、全国規模で広域流通する壺・甕・鉢・石鍋などの貯蔵具・調理具、貿易によって齎される中国陶磁器の供膳具がくみあって食器を構成している（橋本1995）。同様に宇野隆夫はその特色を、「高級な中国製陶磁器や漆器の食膳具、大型の貯蔵具（壺・甕・すり鉢）の広域流通と普及」であり、「在地・遠隔地の各種製品」が「それぞれ単純な構成となり、それらを複雑に組み合わせて食器様式を形づくる」という「食器の地域・器種分業体制」とする（宇野1989、pp. 406～407）。
- (25) 高麗史に記録される、商人の渡航記録は以下のようである：
- 文宗元（1047）・永承2年：筑前国住人清原守武が渡宋して罰せられる
- 文宗29（1075）・永保2年：日本人朝元・時経等12人高麗にわたる
- 文宗33（1079）・承暦3年：日本商客藤原某が高麗の興王寺に法螺等を施入
- 宣宗元（1084）・応徳元年：筑前州商客信通等、高麗に水銀を献上
- 宣宗4（1087）・寛治元年：日本商重元・親宗等、高麗に土物を献上
- 宣宗6（1089）・寛治3（1089）年：大宰府商客等、高麗に水銀、真珠、弓矢、刀剣を献上
- (26) 新里亮人の教示による。
- (27) 私とは視点を異にするが、同様の指摘は大西智和が早くおこなっている。「南島須恵器は農業に不可欠な実用的な容器として需要があり、須恵器生産者も新しい市場を開拓する必要のあったことが、導入の大きな契機であり、また、広範に流通した理由だと考えられる」（大西1996、p. 32）
- (28) 沖縄本島をカムイヤキ流通の中心地とみて、「遠いところからもたらされた交易品である、ということに価値があったため」、沖縄本島ではなく徳之島に窯が築かれたとみる考えもある（大西1996、p. 33）。
- (29) 四大流通圏とは、①九州、②畿内、中国、四国、③東海・太平洋域、④北陸・東北・北海道の日本海域をさす。
- (30) 二月堂に補完されていた東大寺修二会の参籠の日記。現存する最古のものは保安五（1124）年から文永六（1269）

年にいたる一冊。

- (31)『續群書類従』卷第七百二十一所収
- (32)『續群書類従』卷第七百二十一所収
- (33)『續群書類従』卷第七百二十二所収
- (34)『續群書類従』卷第七百二十二所収
- (35)残念ながら、現在ヤコウガイは保管されていない。
- (36)市舶司とは、海上貿易事務の一切を掌る官庁のこと。唐代に始まり、宋代に制度が改革整備された。広州、泉州、明州その他に提挙市舶司とその出張所の市舶務が設置され、港の位地により取り扱う相手国がきまっていた（京大東洋史辞典編纂会編1980、p.372）。
- (37)當真嗣一はグスクを、成立期（13世紀、早くても12世紀半ば以降）、発展期（14世紀代）、成熟期（14世紀後半～15世紀半ば）、衰退期（15世紀後半～16世紀前半）の4期に分けた（當真1985）。
- (38)ピロースクタイプ白磁碗は、厚手の内彎型碗を基本としている。素地はきめこまかい白色及び黄白色をなし、暈付けは幅広で水平である。表面にはロクロ痕の稜線状に巡るものが多い。内底から外面の腰部が高台脇まで施釉されている。口縁部形態と圏線、文様などの有無によってⅠとⅡに分類される。碗Ⅰは、口唇内端を丸くし、口唇直下の外面を指でおさえてロクロをまわし、口唇部外端を尖らしている。内面上部には陰圏線を1本廻らし、下部には櫛描き文のあるものも見られる。碗Ⅱは、丸みをもつ口唇部の内端が内向し、稜を示すものが多い（金武1988）。これは森田勉によって14～16世紀白磁のうちC群とされたものに対応する（森田1982、p.52）。
- (39)森田勉はこれを15世紀前後に比定し（森田1982、p.53）、山本信夫は14世紀から15世紀に比定する（山本1995、p.481）。
- (40)永仁4（1296）年、性恵が書き写したもの（小野玄妙遍修1934）。
- (41)2001年9月におこなわれた第4回沖繩研究国際シンポジウムでの研究発表内容による。

（参考文献）

- 赤司善彦 1991「朝鮮製無釉陶器の流入—高麗期を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』pp.51～67
- 網野善彦 1994「貨幣と資本」『岩波講座 日本通史』第9巻、pp.209～246
- 朝日新聞社西部本社・海の中道遺跡発掘調査実行委員会 1993『福岡市海の中道遺跡Ⅱ』
- 安里嗣淳 1991「中国唐代貨銭『開元通宝』と琉球圏の形成」『文化課紀要』第7号、沖縄県教育委員会文化課、pp.1～10
- 安里進 1975「グスク時代開始期の若干の問題について—久米島ヤジャーガマ遺跡の調査から—」『沖縄県立博物館紀要』第1号、pp.36～54
- 1983「グスク時代=古琉球前期論」『地域と文化』第19号、地域と文化編集委員会
- 1990「熱田貝塚の石鍋A群系土器の年代—金武氏の反論に答える—」『地域と文化』第57号、pp.2～9
- 1991「沖縄の広底土器・亀焼系土器の編年について」『交流の考古学 肥後考古第8号』肥後考古学会、pp.579～593
- 1991「グスク時代開始期の再検討」『新琉球史 古琉球編』琉球新報社、pp.63～90
- 1994「古琉球の宜野湾」『宜野湾市史』第1巻通史編、宜野湾市教育委員会、のちに『グスク・共同体・村—沖縄歴史考古学序説』榕樹書林に再録、本校は後者に拠る。
- 1995「沖縄」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.212～223
- 1996「大型グスク出現前夜=石鍋流通期の琉球列島」『新しい琉球史像—安良城盛昭先生追悼論集』pp.7～26

- 安里進・春成秀爾編 2001『沖縄県大泊浜貝塚』日本人および日本文化の起源に関する学際的研究・考古学資料集  
27
- 筑紫野市教育委員会 1985『西小田地区遺跡 圃場整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査』筑紫野市文化財調査  
報告書第11集
- 太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集
- 江平臨 1999「阿多忠景について」『万之瀬川から見える日本・東アジア—阿多忠景と海の道—』金峰町歴史シン  
ポジウム実行委員会事務局、pp. 17~18
- 宜野湾市教育委員会 1998『伊佐前原第一・第二遺跡 キャンプ瑞慶覧基地内の陸軍貯油施設送油管整備工事に関  
する緊急発掘調査報告書』宜野湾市文化財調査報告書第28集
- 那覇市教育委員会 1994『ニヤジョー毛遺跡』那覇市文化財調査報告書第26集
- 1996『那崎原遺跡—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告—』那覇市文化財調査報告書第  
30集
- 1997『銘苅原遺跡』那覇市文化財調査報告書第35集
- 橋本久和 1995「中世社会と土器研究」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社、pp. 1~12
- 速水侑 1993「最澄と空海」『日本歴史館』小学館、pp. 388~389
- 福岡市教育委員会 1972『多々良遺跡調査報告書』福岡市埋蔵文化財報告書第20集
- 1982『福岡市 海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集
- 池田榮史 1988「類須恵地名表」『琉球大学法文学部紀要 史学・地理篇』第30号
- 1995「南島と古代の日本」『古代王権と交流 西海と南島の生活・文化』名著出版、pp. 267~298
- 2000「須恵器からみた琉球列島の交流史」『古代文化』第52巻第3号、pp. 34~38
- 池畑耕一 1994「鹿児島県・宮崎県・沖縄県」『日本土器製塩研究』青木書店、pp. 337~346
- 1998「考古学資料から見た古代の奄美諸島と南九州」『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集—』渡辺誠先  
生還暦記念論行会、pp. 733~743
- 井上光貞・児玉幸多・林屋辰三郎 1980『年表日本史 第1巻』
- 伊仙町教育委員会 1985『カムイヤキ古窯群Ⅰ』伊仙町文化財発掘調査報告書(3)
- 1985『カムイヤキ古窯群Ⅱ』伊仙町文化財発掘調査報告書(5)
- 2001『カムイヤキ古窯群Ⅲ』伊仙町文化財発掘調査報告書(11)
- 石垣市教育委員会 1983『ピロースク遺跡—沖縄県石垣市新川・ピロースク遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調  
査報告書第6号
- 石井正敏 1993「東アジア世界と日本」『日本歴史館』小学館、pp. 368~369
- 亀井明德 1986『日本貿易陶磁史の研究』同朋社出版
- 1993「南西諸島における貿易当時の流入経路」『上智アジア学』上智大学アジア文化研究所、pp. 11~45
- 1997「東シナ海をめぐる交易の構図」『考古学による日本歴史 10対外交渉』pp. 77~88
- 笠利町教育委員会 1993b『宇宿貝塚東地区(ダンベ山)—一般地方道佐仁・万屋・赤木名線埋蔵文化財宝蔵地に  
伴う発掘調査』笠利町文化財報告第18集
- 1993a『用安湊グスク—主要地方道路竜郷・奄美空港線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』笠利町文化財報  
告第19号
- 1997『笠利町万屋城』笠利町文化財報告第24集
- 河名俊男 2001「琉球弧のネオテクトニクス」『琉球弧の成立と生物の渡来』沖縄タイムス社、pp. 59~83
- 川添昭二 1988「海にひらかれた都市 古代・中世の博多」『よみがえる中世1 東アジアの国際都市博多』平凡

- 社、pp. 8～39
- 木戸雅寿 1993「石鍋の生産と流通について」『中世土器の基礎研究IX 中世前期流通—瀬戸内・淀川水系を中心に—』日本中世土器研究会、pp. 127～143
- 1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、pp. 511～521
- 木下尚子 1996a「『白法螺一口』考—空海請来品の一検討—」『文学部論叢』第50号、熊本大学文学会、pp. 95～123
- 1996b「南島交易ノート—古代・中世における法螺とホラガイの需要—」『東アジアにおける社会・文化構造の異化過程に関する研究』平成6～7（1994～95）年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書、pp. 57～88。
- 2000「開元通宝と夜光貝」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』上巻、高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、pp. 187～219
- 木村茂光 1992『日本古代・中世畑作史の研究』校倉書房
- 金武正紀 1988「ピロースタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』No. 8、pp. 148～157
- 1989「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号、pp. 1～22
- 1991「先島の時代区分」『名護市史セミナー 琉球史フォーラム—考古学の時代区分—』資料、名護市教育委員会、pp. 25～36
- 1994「土器→無土器→土器 —八重山考古学編年試案—」『南島考古』No. 14、pp. 83～92
- 1998「沖縄における貿易陶磁」『日本考古学協会1998年度沖縄大会 資料集』日本考古学協会1998年度沖縄大会実行委員会、pp. 147～158
- 2001「陶磁器・カムイヤキ・滑石製石鍋からみた12世紀頃の沖縄」『復帰25周年記念 第3回沖縄研究国際シンポジウム世界につなぐ沖縄研究』シンポジウム実行委員会・沖縄文化協会、pp. 98～102
- 2001「沖縄における中国陶磁器」『第4回沖縄研究国際シンポジウム 沖縄大会』、p. 39
- 小島環禮 1990「海上の道と隼人文化」『海と列島文化』5、小学館、pp. 139～194
- 宮内庁正倉院事務所・朝日新聞社 2000『よみがえる正倉院宝物—再現された天平の技—』朝日新聞社
- 京大東洋史辞典編纂会編 1980『新編東洋史辞典』東京創元社
- 九州歴史資料館 1985『大宰府史跡出土木簡概報』
- 1986『大宰府史跡 昭和60年度発掘調査概報』
- 1990『大宰府史跡 平成元年度発掘調査概報』
- 2001「平成13年度第1回テーマ展 貿易陶磁器の大宰府流入—9～14世紀の基準資料—」『九歴だより No. 14』
- 三島格 1987「大宰府と南島」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論文集』（下巻）、pp. 330～367
- 宮下貴浩 1999「持鉢松遺跡・小蘭遺跡について」『万之瀬川から見える日本・東アジア—阿多忠景と海の道—』金峰町歴史シンポジウム実行委員会事務局、pp. 7～8
- 森克巳 1975『新訂 日宋貿易の研究』国書刊行会、pp. 176～177、340～343
- 森村健一 1998「堺における貿易陶磁」『日本考古学協会1998年度沖縄大会』資料集、pp. 123～146
- 森田勉 1981「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2、pp. 47～54
- 1983「滑石製容器—特に石鍋を中心として」『仏教芸術』148号、毎日新聞社、pp. 135～148
- 村井章介 1986『週刊朝日百科 日本の歴史 中世 I—9』朝日新聞社
- 永山修一 1993「キカイガシマ・イオウガシマ考」『日本律令制論集』下巻、笹山晴先生還暦記念会、pp. 419～464
- 1997「古代・中世における薩摩・南島間の交流—夜久貝の道と十二島」『境界の日本史』山川出版社、pp. 145～150

- 那覇市教育委員会 1997『銘苅原遺跡—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告IV』
- 名嘉正八郎・知念勇 1985「沖縄のグスクについて」『琉球の歴史と文化 山本弘文博士還暦記念論集』論集刊行委員会、本邦書籍、pp. 229～265
- 中山清美 1999「発掘された奄美のグスク—発掘地報告から—」『白木原和美先生古稀記念献呈論文集 先史学・考古学論究Ⅲ』龍田考古会、pp. 211～246
- 中里壽克 1995「古代螺鈿の研究（上）」『国華』第1199号、pp. 3～18
- 1996「古代螺鈿の研究（下）」『国華』第1203号、pp. 19～26
- 名瀬市教育委員会 2001『奄美大島名瀬市グスク詳細分布調査報告書』名瀬市文化財叢書3
- 1977「中世国家の境界と琉球・蝦夷」『境界の日本史』山川出版社、pp. 106～137
- 小畑弘己 1997「出土銭貨にみる中世・沖縄の銭貨流通」『文学部論叢』第57号、史学篇、pp. 75～99
- 2000「熊本大学構内遺跡における古代コムギの検出とその意義について」『人類史研究会代2回大会発表予稿集』人類史研究会、pp. 39～42
- 荻野繁春 1993「中世西日本における貯蔵容器の生産」『考古学雑誌』第78巻第3号、pp. 31～73
- 沖縄県教育委員会 1978『恩納村熱田貝塚発掘ニュース』
- 1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告書—』沖縄県文化財調査報告書第74集
- 小野玄妙遍修 1934『大正新修大蔵経図像』大蔵出版株式会社
- 大庭康時 1999「博多との関係」『万之瀬川から見える日本・東アジア—阿多忠景と海の道—』金峰町歴史シンポジウム実行委員会事務局、pp. 25～26
- 大西智和 1996「南島須恵器の問題点」『南日本文化』第29号、鹿児島短期大学付属南日本文化研究所、pp. 19～35
- 「琉球王国のグスクおよび関連遺産群」世界遺産登録記念事業実行委員会2001『琉球王国のグスクおよび関連遺産群』沖縄県教育委員会
- 笹山晴生 1993「宮廷の繁栄と貴族」『日本歴史館』小学館、pp. 366～367
- 佐敷町教育委員会 2001『佐敷下代原遺跡—佐敷小学校増改築工事に関する緊急発掘調査報告—』佐敷町文化財調査報告書第3集
- 佐藤伸二 1970「南島の須恵器」『東洋文化』48・49、東京大学東洋文化研究所、pp. 169～204
- 清水周作 1998「鹿児島県大隅街における古代後半期の社会構造及び経済活動に関する一考察」『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集—』渡辺誠先生還暦記念論刊行会、pp. 697～711
- 下地和宏 1978「野城（ぬぐすく）式土器について」『琉大史学』第10号、pp. 34～49
- 1996「野城式土器」『日本土器事典』雄山閣、p. 765
- 1998「中・近世の宮古島—『グスク時代』の遺跡を中心に—」『考古学ジャーナル』427号、pp. 21～25
- 下山覚・中摩浩太郎・渡部徹也編 2000「九州」『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集、pp. 177～187
- 新里亮人 2002「琉球列島における窯業生産の成立と展開」熊本大学文学研究科修士論文。近日中に発表の予定。
- 白木原和美 1975「類須恵器の出自について」『法文論叢』第36号、熊本大学法文学会、pp. 112～126
- 鈴木重治 1981「沖縄出土の中国産輸入陶磁器—勝連城を中心とするグスク出土の資料—」『貿易陶磁研究』No. 1、pp. 9～16
- 高宮廣衛 1966「古墳時代の地域的特色 沖縄」『日本の考古学VI 古墳時代 上』河出書房、pp. 529～537
- 高良倉吉 1989『琉球王国史の課題』ひるぎ社
- 1991『琉球王国』岩波新書261、岩波書店
- 嵩元政秀 1972「沖縄における原始社会の終末期」『南島史論 富村真演教授還暦記念論文集』琉球大学史学会、

pp. 347～361

- 玉井力 1995 「10—11世紀の日本—摂関政治」『岩波講座 日本通史』第6巻、pp. ～65
- 田中公 1993 「日本・中国・朝鮮対外交流史年表—大宝元年～文治元年—」『貿易陶磁—奈良・平安の中国陶磁—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、pp. 540～417
- 當真嗣一 1971 「沖縄における鉄滓遺跡と鉄器の諸問題について」『琉大史学』第2号、琉球大学史学会、pp. 35～46
- 1979 「沖縄のグシク」『考古資料の見方〈遺跡編〉』柏書房、pp. 292～302
- 1985 「考古学上よりみた沖縄のグシク」『紀要』第2号、沖縄県教育委員会文化課、pp. 1～23
- 友寄英一郎・嵩元政秀 1969 「フェンサ城貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要 社会篇』第13号、pp. 55～94
- 土橋理子 1997 「日宋貿易の諸相」『考古学による日本歴史 10対外交渉』pp. 61～76
- 手塚直樹 2000 「12世紀代の貿易陶磁を出土する沖縄本島の遺跡」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』上巻、高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、pp. 295～314
- 宇検村教育委員会 1998 『鹿児島県宇検村倉木崎海底遺跡発掘調査概報』宇検村文化財調査報告書第1集
- 宇野隆夫 1984 「後半期の須恵器」『史林』第67巻第6号、pp. 66～104
- 1989 『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社
- 2000 「中世食器様式の意味するもの 軽量分析による使用法の復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集、pp. 377～430
- 和田浩爾・赤松蔚・奥谷番司1996 「正倉院宝物（螺鈿、貝殻）材質調査報告」『正倉院年報』第18号、pp. 1～39
- 山口正士 1995 「13. ヤコウガイ」『日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（Ⅱ）—分冊— 1. 軟体動物』日本水産資源保護協会、pp. 66～72
- 山本信夫・山村信榮 1997 「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集、pp. 237～310
- 山崎純男 1994 「福岡県」『日本土器製塩研究』青木書店、pp. 274～306
- 山里純一 1995 「南島赤木の貢進・交易」『古代王権と交流 西海と南島の生活・文化』名著出版、pp. 299～322
- 1999 「夜光貝と檳榔の交易」『古代日本と南島の交流』吉川弘文館、pp. 170～186
- 米田雄介・樫山和民 1999 『正倉院学ノート』朝日選書623、朝日新聞社
- 吉岡康暢 1994a 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 1994b 「食の文化」『岩波講座 日本通史』第9巻、pp. 305～321
- 1997 「中世食文化の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

図版の出典：

図1

1～3・5～7：金武正紀1989Fig. 2の3～5・7～9、8・10：同前Fig3の10・11、4・9：沖縄県教育委員会1986第61図1・2、11・12：伊仙町教育委員会1985第44図298・303（一部改変）、13：同前第37図209、14：伊仙町教育委員会2001第29図171、15～17：石垣市教育委員会1983第13図9・10・13、18：沖縄県教育委員会1986第62図1（一部改変）

図2 那覇市教育委員会1997

1：第17図1、2：第19図4、3：第18図1、4・5：第18図1・2（一部改変）、6・7：第41図6・11（一部改変）、8・9：第57図1・2（一部改変）、10・11：第54図10・13、12：第47図5、13：第54図12（一部改変）、14：第49図4、15：第51図10、16：第52図13（一部改変）